彩の国の道徳　　道徳教育指導資料集

彩の国
埼玉県

学級づくりの羅針盤

～いま、道徳が「いじめ問題」にできること～

平成25年3月

埼玉県教育委員会

目　次

● 本資料の活用にあたって …… 2～5

			【資料編】	・	【活用編】
1	せいろくのゆうき	（小学校低学年）	7	・	36
2	がんばって	（小学校低学年）	9	・	37
3	かなちゃんへの手紙	（小学校中学年）	11	・	38
4	わたしとのぞみ	（小学校中学年）	13	・	39
5	わたしって何	（小学校高学年）	15	・	40
6	あなたも同じ･･･	（小学校高学年）	17	・	41
7	忘れていたこと	（中学校）	19	・	42
8	最初の公認女性医師･荻野吟子	（中学校）	21	・	43
9	私たちの初詣	（中学校）	23	・	44
10	仮入部	（中学校）	25	・	45
11	心のパス交換	（中学校）	26	・	46
12	後味の悪い再会	（高　校）	30	・	47
13	誠の心	（高　校）	32	・	48
14	見えない相手	（高　校）	34	・	49

●「人間としての在り方生き方に関する教育」の推進方針 … 50・51

本資料の活用にあたって

最近、いじめに端を発する痛ましい事件が続発しております。学校においては、「いじめは、絶対に許さない」という強い決意のもと、いじめを根絶し、児童生徒が明るく安心して生活できる学校づくりをすることが喫緊の課題となっています。そのためには、まず、いじめの早期発見に努め、発見した場合は、直ちにいじめをやめさせ、完全になくなるまで徹底して指導する必要があります。

しかし、いじめを根絶するためにはそれだけで十分とは言えません。それは、いじめの起きる要因が、多様で何か一つに特定できるものではなく、また、誰の心の中にあるものだからです。今は、学校の中にいじめがなくても、一人一人の心の中にいじめの要因がある限り「いじめはいつでもどこにでも起こり得る」ものです。学校においては、目前のいじめ問題への直接的な指導を行うだけではなく、全教育活動をとおして、それぞれの活動の特質に応じた多様な指導を行い、未然防止に努めていくことが重要となります。

本資料は、「道徳の時間」に焦点を当て、どのように指導をすれば、いじめを未然に防止できるかその手がかりとなる資料として作成しました。主に本県独自の道徳教材「彩の国の道徳」を活用した指導方法について掲載していますが、本資料に示してある視点をもとにすることで、他のどの資料でもいじめの未然防止に活用できます。

児童生徒に豊かな心を育てるとともに、いじめを未然に防止し、児童生徒が共に歩み、夢を育てることのできる学校づくりに御活用いただければと願っています。

道徳の時間に児童生徒の「いじめをしない、許さない」資質をはぐくもう

道徳の時間は、児童生徒一人一人が、生命尊重や思いやりの心など人間としてよりよく生きるために必要な道徳的価値についての自覚を深める時間です。また、児童生徒が道徳的価値を深める過程で、人間としての在り方や生き方についての考えを深め、将来出会うであろう様々な場面，状況においても，人間として適切な行為を主体的に選択し，実践することができるような内面的資質を育成する時間でもあります。

例えば、道徳の時間に「寛容な心」を学習し、その大切さが分かると、自分と異なる立場の人を受け入れることができるようになります。「勇気」や「思いやりの心」を身に付けることができれば、困っている人に対して進んで手を差しのべることができるようになります。このように様々な道徳的価値のすばらしさを児童生徒にしっかり理解させることが「いじめ問題」の未然防止につながります。また、理解した道徳的価値をもとに自分の在り方、生き方を考えさせることで、児童生徒は、よりよく生きようとする意欲やそのための課題を持ちます。そして、いじめは卑劣な行為であることを自覚するようになり、「いじめ」を未然防止します。

道徳の時間を活用して、温かい人間関係を築こう

「いじめ」を未然に防止するためには、学校や学級に「いじめを認めない土壌づくり」をすることが重要です。「いじめを認めない土壌」は、温かな人間関係からつくられます。

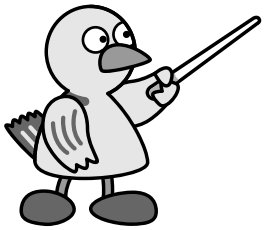
「道徳の時間」は、道徳的価値（人間らしさ）について話し合います。話し合うことによって、児童生徒は、「人間らしさとはどういうことか」、「それについて自分がどう考えているか」を理解します。同時に、友達の考え方や感じ方も理解することができます。友達と自分の違いを理解することは、温かい人間関係づくりの第一歩となります。

また、「道徳の時間」は、教師と児童生徒が人間としてよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合う時間でもあります。教師が児童生徒と共によりよい人生を求めて努力するという姿勢を示すことで、教師と児童生徒の好ましい人間関係が醸成されます。

「道徳の時間」で児童生徒一人一人の自尊感情を高めよう

いじめを未然に防止するためには、児童一人一人に、人から認められる体験を積ませることが大切です。それは、人は、他人から認められる経験をしてはじめて、他人を認めることができるようになるからです。お互いが認め合う関係においては、いじめは起こりません。

「道徳の時間」の学習は、資料や体験などから感じたこと、考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論や討議などにより意見の異なる人の考えに接し、協同的に議論したり、意見をまとめたりすることが中心となります。したがって、「道徳の時間」は、児童生徒がお互いの考え方や感じ方の違いにふれる機会が多くなります。そこで、この機会を活用して、児童生徒全員が互いを認められるようにしていくことで、いじめを未然に防止します。



自尊感情

- ありのままの自分でいいんだ（肯定感）
- 自分はかけがえのない存在だ（存在感）
- 一生懸命頑張ることができた（充実感）
- 自分はクラスや人の役に立っている（有用感）
- 自分はみんなから受け入れられている（受用感）
- わかった、できた（達成感）

年間指導計画に基づき、道徳の時間を計画的、発展的に行うことが重要です。

共に歩み、夢を育てる学校

いじめは恥ずかしい行為

自らの在り方、生き方を考える児童生徒

道徳の時間

「友だちとなかよくしたいな」 「私と違う意見も大切なんだな」	「困っている人を助けたい」 「正しいことは勇気を持ってできるようにしたい」	「自分は自分らしく生きたい」 「私の命は、かけがえがないものなんだ」
【いじめる子を出さない】	【見て見ぬふりをさせない】	【いじめられる子を出さない】

愛校心　**友情** P37　寛容　**勇気** P35　正義
誠実　責任感　**礼儀** P36
公正公平 P45　**感謝** P40　個性伸長　**生命尊重** P38　人間の弱さ醜さの克服

児童生徒同士の温かな信頼関係　**児童生徒の自尊感情**　児童生徒と教師の信頼関係

資料活用のポイント

仮　入　部

（「彩の国の道徳」自分を見つめて　埼玉県教育委員会）

本当の友達って、どんな関係なの？

友達は、家族以外で特にかかわりを深く持つ存在であり、子供たちは互いに影響し合って成長していく。友情について考えることは、人間関係が希薄になっている今
ことである。子どもたちが豊かに生きていくためにも、同世代
協力し合い、切磋琢磨できる友を持てるようにしたい。
本資料は、友達から自分が入部したい部と違う部に誘われた
達関係」の２つの思いから迷うという資料である。子供
関係を省みることのできる資料である。

【いじめ問題予防の視点】
真の友情について考え、自己の友達関係を見つめ直すことで、子供たちが友達をいじめたり、あるいは友達がいじめられているのを見て見ぬふりしたりすることのないようにする。

学習する内容といじめの未然防止のかかわりについて述べられています。
本資料集で取り上げた以外の資料を活用する場合も、ここに書かれている視点で資料をみると、いじめの未然防止に役立てることができます。

ね　ら　い

● 友達関係について考えを深め、互いに認め、励まし合える友達を求めようとする態度を育てる。

授 業 の 流 れ

● 真の友情とはどんな関係なのだろうか。事前アンケートを活用し、
のかを知る。

人間関係づくりや自尊感情の高揚にかかわる部分

● 「雅恵」と「由美」の姿から、真の友情とは
いうことなのか話し合う。
⑴雅恵はどんな思いで、由美の申し出を断ってまで、バスケット部の練習に参加したのだろうか。
⑵雅恵は、なぜバスケット部にはいるかソフト部にはいるか迷っているのだろうか。
⑶「本

⑴友達の誘いを断った雅恵の気持ちを考えさえ、バスケット部への思いの強さを感じ取らせる。
⑵雅恵の葛藤について話し合うことで「友情」についての多様な考えを引き出すようにする。
⑶これまでの話合いをもとに「真の友情」について考えさせるとともに、自分の友達関係を振り返らせる。

いじめの未然防止の視点に大きくかかわる部分

● 真の友情について教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

● 学級活動・・話合い活動を進める中で、自己理解、他者理解、信頼関係づくりを行い、友情を広げ、深めていくきっかけとする。

1　せいろくのゆうき

せいろくは、しぜんの中であそぶことが大すきな子でした。いつも近じょの子どもたちとみんなでそんでいました。

今日は、川であそぼうと思い、はしの近くまできました。すると、大きな男の子が三人でとおせんぼをしていました。せいろくは、そばの木にかくれるようにしてようすを見ていました。女の子がないています。

（よわいものいじめなんかして。よし、たすけてやろう。）

と思いましたが、男の子はみんなせいろくより大きい子です。

（うーん。こっちは一人だもんな。一人じゃしょうがないや。）

せいろくは、しらないふりをしてそこをそっと通りすぎました。

でも、いつもあそんでいる友だちが、

（せいちゃん、がんばれ。）

と言っているような気がしてきました。

（そうだ。ぼくが言わなくちゃ。）

「おい、よわいものいじめはよせよ。」

せいろくは、おもいきって言いました。

「なんだ。おまえだっていつもいたずらをしているじゃないか。」

一ばん大きな子がせいろくのかたをつかんで言いました。ほかの男の子もこわい顔でにらみつけました。

「でも、よわいものいじめはしたことないぞ。よせよ。」

せいろくは、顔をまっ赤にしてはっきりした声で言いました。それにおどろいたのか、男の子たちは、

「なんだい。なんだい。」

と、ぶつぶつ言いながら行ってしまいました。

せいろくは、きゅうにむねがどきどきしてきました。そして、ふうっと大きないきをしました。

「ありがとう。ほんとうにありがとう。」

というと、女の子ははしっていきました。はしをわたりきるとにっこりしながら手をふりました。

（ぼく、まけなかったぞ。）

せいろくは、心の中でさけびながら、家にむかってはしり出しました。

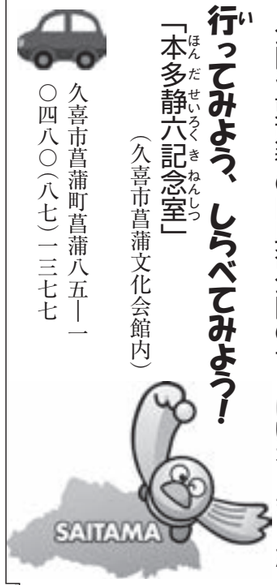
心やさしく、ゆうきのあるせいろくは、のちに日本のこうえんの父とよばれました。みどりをふやすために、すすんで多くのしごとをした、「本だせいろく」は、さいたまけんで生まれた人です。

人物しょうかい

一八六六年、埼玉県久喜市に生まれた本多静六は、日本でさいしょの林学はかせになり埼玉県の大宮公園や東京都の日比谷公園のせっけいをしました。

行ってみよう、しらべてみよう！

「本多静六記念室」
（久喜市菖蒲文化会館内）
久喜市菖蒲町菖蒲八五―一
〇四八〇（八七）一三七七



2　がんばって

今日は、はじめてのせきがえの日です。たけしは、わくわくしていました。たけしは二はんになりました。ほかの三人は、みんなはじめておなじはんになったお友だちです。

「新しいはんのお友だちに自分の名前を言いましょう。すきなものも言えるといいですね。」
と、先生が言いました。
「まさおです。かぶとむしがすきです。よろしくおねがいします。」
「かなこです。おえかきがすきです。よろしくおねがいします。」
一人ずつじゅんばんに言いました。
つぎは、えりです。えりは、顔をまっかにして下をむいていました。
「よろしくおねがい…。」
とても小さな声でした。
「もっと大きい声で言って。」

一生けんめいにきこうとしているまさおが言いました。えりは、ますますこまった顔をしています。たけしは、どうしていいかわかりません。
「だいじょうぶだよ。」
そのとき、かなこが言いました。すると、さっきまで下をむいていたえりは少しずつ顔を上げました。
（えりさん、あともう少し。）
たけしは、思わず心の中でそうさけびました。そして、えりの顔を見て、

「えりさん、がんばって。」
と、力いっぱいおうえんしました。
すると、えりは大きくしんこきゅうをしてから、
「えりです。なわとびがすきです。よろしくおねがいします。」
さっきよりも大きな声で言いました。
「なわとびは、楽しいよね。」
にこにこしながらまさおやかなこが言いました。
えりは、言いおわるとにこっとわらい、
「たけしさん、ありがとう。」
と、言いました。
たけしは、そのことばをきくと、なんだか心がふわっとあたたかくなりました。

つぎは、たけしのばんです。
「たけしです。ぼくもなわとびがすきです。よろしくおねがいします。」
休み時間になりました。

「みんなでいっしょになわとびしよう。」
「うん。あそぼう。」
二はんのみんなの楽しそうな声が校ていいっぱいにひびきわたりました。

3　かなちゃんへの手紙

「かなちゃんのうそつき。」
わたしは、大きな声をあげた。仲良しのかなちゃんと、けんかをしてしまったのだ。
「いっしょに遊ぶ約束をしていたけれど、急に用事ができたんだもの。仕方がないでしょ。」
「その言い方ってなに。わたしに悪いなあっていう気持ち、全然ないわけ。」
わたしの言葉を聞いて、かなちゃんは、プイッと教室を出ていってしまった。わたしは、むしゃくしゃして、気持ちがおさまらない。
（わたしは、悪くない。かなちゃんが悪いんだ。それなのに、あやまりもしないなんて。）

わたしの心が、かなちゃんへの不満でいっぱいになったとき、かなちゃんに悪口の手紙を書こうと思いついた。そして、つくえの中から紙を出して、頭にうかんだ言葉を、そのまま書いた。

自分で書いた言葉に、わたしは少しドキッとしたけれど、やめられなかった。この手紙を、かなちゃんのつくえの中にこっそり入れたらどうだろう。かなちゃんは、この手紙を読んで、どう思うだろう。
わたしは、教室の中にだれもいないのをたしかめて、かなちゃんのつくえの前に立った。心ぞうが、ドキドキした。
わたしは、しばらくその場に立っていた。けれど、結局、かなちゃん

のつくえの中に手紙を入れることはできなかった。じゅ業が終わり、わたしは、手紙をポケットにしまったまま、家に帰った。
家に着くと、すぐお母さんから声をかけられた。
「かなちゃんから電話があったわよ。お父さんが遠くに仕事に行っていて、今日ひさしぶりに帰って来たんですって。家族でお出かけすることが急に決まって、あなたと遊べなくなったんだって。ごめんなさいって、何回もあやまっていたわよ。」
わたしは、びっくりしてかなちゃんへの手紙をポケットから取り出し、広げると、思わずすわりこんでしまった。
お母さんは、わたしの手の中の手紙をじっと見つめながら、
「言葉って、大事よね。口から出た言葉は、消しゴムで消すわけにはいかな

いから、とってもよく考えて口に出さなきゃいけないのよ。手紙も同じね。一度その手紙を目にしてその人の心がきずついたら、その言葉は、もう二度と取り消すことができないものね。」
と静かに言った。
わたしは泣きながら、持っていた手紙を細かくちぎった。お母さんは、わたしの手をそっとにぎりしめて、やさしくこう言った。
「もう一度、かなちゃんに手紙を書いてみたらどうかしら。あなたの気持ちが、きちんと伝わる言葉で書いた手紙をね。」
わたしは、深くうなずいた。

「ねえ、さき。音を消してゲームをした方がいいよ。みんなのめいわくになってるよ。」
と、きっぱりと言った。わたしはドキドキした。お姉ちゃんがあんまりはっきり言うから、二人がけんかになってしまうと思ったのだ。けれどさきちゃんはあわてて音を消し、
「気づかなかった。ごめんごめん。ありがとね、言ってくれて。」
とお姉ちゃんに笑顔を返した。

わたしはびっくりした。思わず、
「友達なのによく注意できるね。」
と言うと、お姉ちゃんは、
「友達だからこそ、注意できるんだよ。反対の立場でも、さきは同じようにわたしに言うと思うよ。言われてちょっとムッとすることもあるかも知れないけれど、わたしとさきはちゃんと分かり合ってる親友だから。ねっ。」
そう言って、二人は顔を見合わせてまた笑った。
電車のまどから動く景色を見ながら、わたしはじっと考えた。のぞみのやっていることを思い出すと、心配でたまらない。でも、お姉ちゃんとちがって、のぞみに何も言えない自分が悲しかった。
そのとき、ちょっと自まんそうにさきちゃんを見るお姉ちゃんの横顔がわたしの目に入った。わたしはのぞみの笑顔を思いうかべ、そして思い切ってお姉ちゃんに言った。
「お姉ちゃん、聞いてほしいことがあるんだ。だれにも相談できなかったんだけど、あのね…。」

4　わたしとのぞみ

わたしとのぞみは、仲良しの友達だ。のぞみは、下級生の子が泣いていると、やさしく声をかけて話を聞いてあげたり、わたしの係の仕事が大変なときは、手伝ってくれたりする。わたしはのぞみが大好きだ。そんなのぞみが、最近クラスメイトのとも子が気に入らないと言う。
「とも子ってさ、思ってることを何も言わないでいつも笑ってるだけじゃん。見てるだけでムカつくんだよね。とも子がこまっている顔を見たら、少しはイライラがへるかも。」
何気なくそう言うのぞみを止める言葉は、わたしにはなかった。
よく日からのぞみは、とも子の物をかくし始めた。他の友達をさそって次々ととも子の物をかくし続けるのぞみを見るとどうしていいか分からない。
（でも、わたしはいっしょに物をかくしてないし、特に悪いことをしてるわけじゃない。）
のぞみと友人達は、ヒソヒソとしゃべり、とも子を見ながらわざと大きな声で笑っている。その横で先生といっしょに物をさがし続けるとも子を、わたしは何も言えず、ただ見ていることしかできなかった。もやもやとした心のまま。
日曜日、すっきりしない気持ちをかかえて、わたしはお姉ちゃんとお姉ちゃんの友達のさきちゃんと遊びに出かけることになった。電車の中で、さきちゃんが大きな音を出したままゲームを楽しんでいる。車内の人はめいわく顔だけれど、お姉ちゃんの友達だし、さきちゃんには何も言えないなあと思っていた。するとお姉ちゃんが、

5　わたしって何

幸恵のクラスでは、最近人気のテレビタレントの話題がよくでる。

「昨日の番組に出ていた芸人さん、おもしろいね。」

「『おまえは、この世から去れ！』っていうギャグ、最高だよね。」

たわいのない話ばかりだったが、友達と共通の話題でもりあがるのが、楽しくて仕方がなかった。

お母さんは、少し心配しているようだった。

「まさか、友達を傷つけるようなことを言っていないわよね。」

「大丈夫よ。心配しないで。友達の悪口や人をけなしたりするようなことは言わないから。」

幸恵はきっぱりとお母さんにそう言った。よけいな心配で楽しみをうばってほしくなかったからだ。

ある日のこと、幸恵が教室そうじをしていると、小さな封筒が落ちていた。「秘密」という文字が書かれていた。幸恵は、拾い上げた。読むのは悪いと思ったが、「秘密」の文字がどうしても気になった。そこで家に帰ったあと、自分の部屋でこっそり読んでみた。

小さな紙切れに走り書きの文字がならんでいた。

「幸恵って、このごろ生意気だと思わない？気に入らないな。本当に『この世から去れ！』って感じ。（笑）」

幸恵はまさか自分のことが書かれているとは思わなかったので、一瞬目をうたがった。しかし、何度読み返しても、書いてあるのは自分のことだった。今まで何気なく使っていた「この世から去れ」という言葉が心にするどくつきささった。胸が苦しくなり、涙がこみあげてきた。

「わたしって何…。わたしは友達からきらわれているの。わたしって、この世からいなくなればいいと思われているの。」

幸恵は、何をするのもいやになった。お母さんの顔を見るのもつらくなり、一人で部屋にこもっていた。

「わたしって何なのだろう。みんなからいやがられている存在なのだろうか。本当にこの世からいなくなった方がいいのかな…。」

幸恵は『この世から去れ』の言葉が頭から離れず、涙があとからあとからこぼれてきた。

どのくらいの時間がすぎたのか、窓の外はだいぶ暗くなっていた。ふと窓ぎわにかざってある写真が目に入った。幸恵が生まれたばかりにとった写真だ。家族の真ん中で小さな自分が楽しそうにはしゃいでいる。お父さんもお母さんもうれしそうな顔でうつっていた。

幸恵は、その写真をしばらく見つめていた。

「幸恵、夕食の時間よ。」

お母さんが部屋をのぞきこんで声をかけた。その声を聞いて、幸恵は思いつめてカチカチに固まっていた心が少しほどけるような気がした。

「お母さん、わたしがいてよかった？」

思いもよらない言葉が幸恵の口から出てきた。お母さんは、一瞬おどろいたような顔をしたが、すぐに笑顔にもどって言った。

「そうね…。幸恵のいない世の中なんて考えられないわ。幸恵は、家族の宝物よ。」

「わたしは、宝物…。」

幸恵は暗い自分の部屋から出た。食卓はおいしそうなにおいでいっぱいだった。

数日がたち、帰りのあいさつの後、日直だった私は、仕事をやり終えて昇降口を出た。うさぎ小屋のところに、ひとりで飼育当番の仕事をしている明奈がいた。周りを見たが、クラスの子はだれもいなかった。

「ねぇ明奈。」

私は明奈に声をかけた。

でも、明奈は私を見ようとすらしなかった。うさぎにえさをあげ終わると、

「あなたも郁美さんたちと同じよ。」

そう言って、明奈はうさぎ小屋を走り去った。

明奈を見送る私の頭の中で、「あなたも同じ…。」という言葉が何度も響いていた。

次の朝、私はひとりでいる明奈を見ていた。

「ガタン。」

私は立ち上がった。

一瞬のうちにみんなの視線が私に集まり、教室はざわめいた。それでも私は自分の思いをはっきりとみんなに伝えた。教室はしーんと静まりかえった。明奈はじっと下を向き、郁美はおどろいたような目で私を見ていた。私の全身はカッと熱くなった。

その後、クラスみんなで真剣に話し合い、明奈にも徐々に笑顔がもどってきた。そして、クラスのふんい気が以前よりも明るくなっていくのを私は感じていた。

6　あなたも同じ…

「明奈、これ、そうじ用具入れにあったよ。」

そう言って私は、明奈に消しゴムを手わたした。明奈はだまってそれをポケットにしまい、床をふいていた。ただ、その日はうっすらと涙ぐんでいた。

次の日の休み時間、私が教室で本を読んでいると、

「ねぇ、今日は何隠す？」

「うわばきやろうか。」

「いいね。」

「明奈って生意気だよね。」

「このあいだ私のことにらんでたよ。」

教室の後ろで、郁美たち数人がひそひそと話をしている声が聞こえてきた。

郁美たちは、先生のいるところでは、自然なそぶりをしているけれど、いないところでは、明奈の悪口を言ったり、変なあだ名をつけて呼んだりしていた。郁美たちはクラスの中心的な存在で、みんなへの影響力が強かった。だから、明奈に対するいじめを知っている子もいたけれど、何も言えないでいた。それどころか、中にはいっしょにそのあだ名を使ったり、明奈をさける子も出てきた。それでも、私は休み時間になると、ひとりでいる明奈のところへ行き、進んで声をかけるようにしていた。

そんなある日のこと、私が体育着に着替えようとすると、体育帽子がなくなっていた。（確かに袋に入れてあったはずなのに…。）周りを見わたすと、郁美たちが私の方を見て笑っているような気がした。そして、私と目が合うと、みんな私から目をそらした。帽子は、トイレで見つかった。

それから私は、休み時間になっても、明奈のところには行かなくなった。その後、私の持ち物がなくなることはなかった。

7　忘れていたこと

宏が通っているM中学校は、今年度開校三十周年を迎え、文化祭は記念式典も交えて盛大に計画されることになった。宏は、M中学校の生徒会長として、文化祭を自分の手で大成功におさめようと力を入れていた。さらに、文化祭実行委員会組織の執行部としても、ステージ部や展示部、式典部や装飾部などをまとめて進めていかなければいけない立場であった。

「一年生のステージ発表の内容、イマイチなんだよな。拓海、頼むぜ。」

「ああ。でも一年生だし、初めてだからしょうがない気もするんだけどな……。いちおう、一年生の代表を集めて何とかアドバイスしてみるよ。」

拓海は副会長で、宏のことをよくバックアップしてくれる。しかし、宏が一人で突っ走ってしまうところが少し気になっているようだった。

「あと二週間あるから何とかなるだろ。じゃ俺、他の部門の様子も見てくるから、よろしく。」

宏はそう言うと、生徒会室を出て行ってしまった。その後も宏は執行部として全体をまわり、順調に準備が進んでいるかのように見えた。

文化祭の三日前になり、宏は仕上げの段階になっているはずの装飾部を確認しに行った。ステージ部の仕事がひと段落ついた拓海も一緒だった。

「おい咲紀！三日前なのにまだそんなことをやっているか。体育館の装飾終わらないぞ！」

咲紀が担当していた装飾部の仕事が、予定していた装飾の五分の一くらいしかまだ終わっていなかった。宏は咲紀に任せっきりで、久しく装飾部の確認をしていなかったのだ。

「だって、『今、母校に思う』の全校生徒分のコメントをチェックしてから体育館に掲示しろって宏が言うから……。」

「確かに言ったけど、そこに時間をかけなくていいんだって！これじゃ、どう見たって間に合わないよ。」

「……。」

「俺は展示部と式典部の所にも行かなきゃならないから……。とりあえず、手の空いている実行委員を装飾部の仕事にまわそう。拓海、先生に許可もらって放送してくれないか。」

「……わかった。」

その後、各部門から何人かに協力してもらい、何とか予定していた装飾の準備が前日までにできた。しかし、宏は「他の部門のことがあるから」と装飾部に顔を出さなかった。

すべての準備を終え、生徒会役員が生徒会室に集まったとき、宏はまた、咲紀を責めた。

「咲紀。他の部に余裕があったからよかったものの、そうじゃなかったら最悪だったな。俺は装飾部だけにつきっきりってわけにはいかないんだからさ。」

「ごめん……。」

それを聞いていた拓海が、我慢しきれない様子で言った。

「宏、もういいだろ。結局みんなのおかげでいいものができたんだし。宏は咲紀のことを責めるけど、何も手伝っていないだろ。執行部として忙しいのはわかるけど、装飾部のことが心配だったら、少しでも顔を出して様子を見に行けばよかっただろ。自分だけで文化祭をつくってるなんて思うなよな！」

そう言うと、拓海は自分の荷物を整理して生徒会室を出て行ってしまった。宏は、拓海の思いがけない態度に手に汗がにじんでくるのを感じるだけで、何も言い返すことができなかった。学校を出ても足取りは重く、すっきりしない気持ちを抱えたまま帰宅した。

帰宅後、総合的な学習の時間の宿題で、埼玉の偉人に関する新聞を作成し提出しなければならないことに気付いた。

（まずい。今日やっておかないと、班のみんなに迷惑かけちゃうな。）

宏の班は、「塙保己一」について協同でまとめていくことになっていた。一応、資料は集めていたが、まだ整理をしていなかった。

江戸時代に現在の埼玉県本庄市児玉に生まれた「塙保己一」は、七歳で失明してしまうが、驚異的な記憶力で数万冊と言われる古典や古文書を暗記した。古い資料を分類するなど、木版刷りで「群書類従」を出版した。完成にいたるまでに四十一年の歳月をかけている。

しかし保己一は、

「多くの人の協力や支えがあったから為しえたことである。」

と常に周りを気遣い、感謝の気持ちで接していたという。

宏は新聞にまとめているうちに、文化祭準備のことを思い出した。一年生に説明している拓海の姿。生徒のコメントをチェックしている咲紀の姿や装飾を手伝ってくれている実行委員の姿……。そして、今日の放課後のこと……。（みんながやってくれたから……。）

文化祭当日の朝、宏は少し早めに家を出ると、通学路の途中で偶然、拓海と会った。

「宏、昨日はごめん。俺、少し言いすぎた。」

「いや、俺の方こそカリカリしててさ……。」

「でも、俺たち宏には感謝しているんだぜ。」

「感謝？」

「そう、宏が全体を見て指示してくれなかったら、準備がこうは進まなかったもんな。」

「……。」

しばらく歩いて校門に着いた。

「拓海、俺ちょっと先生のところに行ってくる。大切なこと、忘れていた。」

（先生に見てもらっていた今日の会長あいさつの文に追加しよう。）

宏は何かが吹っ切れたような気がして、昨日までとは違う自分を感じていた。

8　最初の公認女性医師・荻野吟子

年号が明治と変わった維新の年、荻野吟子は若くして、熊谷の名家に嫁ぎました。数えで十八歳（満十六歳）のときでした。しかし、不幸なことに結婚後まもなく病気にかかりました。この病気が吟子を一生の間、苦しめることになったのです。

実家に戻った吟子は、離婚し、治療のために東京に出ました。しかし、婦人科の治療を受けた病院で、女性として、耐えがたい経験をします。男性の医師や医学生の前に、自分の体をさらさなければならなかったからです。

（女の医者がいれば、こんな恥ずかしい思いをしないですむものを。）

このとき、吟子は、日本に女性の医師がいないことを疑問に思い、その必要性を痛感したのです。気の弱い女性は病院にも行けず、手遅れになる……。このつらい経験をした一人の女性として、是が非でも自分が医師にならなければならない、そんな使命感に駆られたのです。

退院した吟子は故郷に帰り治療を続けながら学問に励みました。

しかし、家族にはなかなか打ち明けることができません。女性には学問はいらない、むしろ女性の幸せには学問はじゃまになる……。女性が医者になるなんて考えられない……。そんな空気が支配的だったこの時代を考えれば、やむを得ないことだったのかもしれません。男尊女卑の封建的な風潮に支配された時代でした。まったく無謀なこととしか思えなかったのです。しかし、吟子の、（自分が立ち上がらなければ。）という熱い思いは、もう誰も止めることはできませんでした。

吟子は国学者として、また漢方医として高名な井上頼圀の門に入ることになりました。二十三歳の時のことです。井上のもとで吟子の才能は開花していきます。吟子は一年ほど甲府の私塾の教師となった後、東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）で学びました。そして二十九歳になり、卒業間近の吟子は、教師になる道は選ばずに、医学校への進学の機会をうかがっていました。「女子は受け入れていない。」という情勢の中で、吟子は好寿院という医学校に入学する幸運に恵まれました。

ただ一人の女性ということで、時には露骨な嫌がらせもされました。しかし、利根川の河原で育つ雑草のように、踏まれても、風塵をかぶっても、強靱に生い育つ、まさに吟子はそのような女性でした。このような毅然たる吟子の態度や小柄で清楚な雰囲気に、いつしか学生たちも男女の偏見を捨てて、「荻野君」「吟子君」と、親しく声をかけるようになり、時にはミルクホールなどにも一緒に行くようになりました。吟子にはこれが励みとなって、さらに勉強に励むようになりました。

明治十五年、抜群の成績で好寿院を卒業しました。時に吟子は三十二歳。医師になろうと決意して故郷の俵瀬村を後にしてから実に九年が過ぎていました。勉強一筋に過ごしてきた自分を振り返って、よくもここまでがんばったものだと、自分が愛おしく、感慨ひとしおのものがありました。

好寿院を卒業した吟子は、さっそく医院開業の試験を受けようと東京府（現東京都）や埼玉県に願書を提出しました。しかし、いずれも届いたのは「願書却下」の通知でした。女性というだけで職業が差別されている……。（女というだけで願書さえも受理されませんでした。）

明治時代になっても制度上の壁が吟子に高く立ちふさがっていたのです。翌年にも吟子は、再び東京府と埼玉県に受験願書を提出しましたが、結果は同じでした。ならばと吟子は国の役所に請願書を提出しました。しかし、ここでも「却下」というつれない返事だけでした。ここにきて吟子の憤りは頂点に達します。

（どうして女性というだけで、この世は私を受け入れてくれないのか。）

それでも吟子はあきらめずに、女性に医院開業試験の許可を得るための運動を続けていきました。

明治十六年十月に、来年一月より施行される「医師免許規則」が公布されました。その条文を読むかぎりでは、女性に受験資格がないなどの記述はありません。

明治十七年四月、吟子は、当時、政府の医事関係者を訪ねました。また、親交のある人たちには、日本でだめなら外国へ行って資格を得て日本に戻り、開業するしかないとも語っていたようです。そのような時に、吟子は、井上頼圀の『令義解』の講義で、「女性医師」について書かれている箇所を学んだことを思い出しました。平安時代に作られた養老令の注釈書『令義解』巻八の『医疾令』という最古の医事法令に「女性医師」についての記述があったのです。そこでかつての師頼圀は、吟子の依頼に応じて、政府の医事関係者に、わが国にも女性医師の前例があることを証明してくれたのです。もはや女性の医院開業試験の受験を拒む理由はなくなりました。

そして、とうとう女性にも受験の機会が与えられることになりました。明治十八年、こうしてわが国初の公認の女性医師が誕生しました。吟子は三十四歳になっていました。

その後、東京と北海道で創院して医療に当たるとともに、女性の地位向上や差別や偏見のない社会の実現をめざして多くの功績を残していくことになるのです。

参考　堺　正一『埼玉の三偉人に学ぶ』（埼玉新聞社）
奈良原春作『荻野　吟子』（国書刊行会）

9　私たちの初詣（はつもうで）

「5、4、3、2、1。ハッピーニューイヤー。」
テレビでのカウントダウンと一緒に私は、携帯電話の送信ボタンを力強く押した。いよいよ新しい年の始まりだ。今年も良い年になってほしいなあと、私は携帯電話を閉じた。しばらくすると携帯にどんどんメールが送られてきた。『あけましておめでとう(^^)、今年もよろしく。』のデコメールで、どの画面もにぎやかだった。それをきっかけに、新年のメールのやりとりに追われた。やりとりが一段落した頃、私は優子からの返信がないことに気付いた。
優子は今のクラスになって仲良くなった友だちだ。部活動も同じなので、何かと一緒にいることが多く、今は何でも話せる一番の友だちだ。

「ねえ、優子だけ『あけおめメール』が来ないんだけど。」
真希からのメールだった。
「優子の事だから、もう寝てるよ。」と返した。
「私たちのことシカトかな。」今度は別の友だちからだ。
「シカトってことはないと思うけど。」と返した。
「明日、いやもう今日だよね。うちらで初詣に行かない？」
真希からまたメールが来た。
「いいね。行く行く。」私は返信した。
「じゃあ、九時に神社で。」

「オッケー。優子は？」真希に送った。
「優子はメール来ないからいいんじゃない？」
私は一瞬優子のことを考えたが「そうだよね。」と、同意すると、
（メールを返してこない優子が悪いんだよ。）
そうつぶやいて携帯電話を置いた。
約束どおり九時になると、メールのやりとりがあった六人が集まった。みんなでお参りの行列に並んだ。
時々優子の事が話題になった。「メールをしてこないなんて、友だちじゃない。」など、その場にいない優子のことになるとみんな厳しかった。ちょっとそれは言い過ぎだなあと思いながらも、私は適当に話を合わせた。そのうち誰かの携帯が鳴り、それぞれ別の友だちとのメールを楽しみだした。ふと気が付くと私は一人ぽつんとしていた。みんなそれぞれ携帯の画面に夢中なのだ。
「せっかくみんなで集まったのに……。」
私も携帯を開いた。

お参りも終わり、屋台でクレープを買って食べていると、真希が
「優子が来てるよ。」
と、声をひそめて言った。そっと見てみると、優子は家族でお参りの列に並んでいた。家族で楽しそうに話をしていた。優子が私たちに気付かなければいいなあと、私は目を伏せた。

しかし、真希が大きな声で「優子ー。」と叫び、優子に手を振った。優子は気付いて手を振り返してきたが、私たちが一緒だとわかって、急に気まずそうな顔をして手を引っ込めた。
「見た？今の優子の顔。メールを返してこないからだよ。もう友だちじゃないって送っちゃおう。」
と、真希がメールを打ち出した。
「ちょっと。真希、待って……。」
私はとっさに真希の携帯を取り上げた。

その日の午後、ポストには年賀状が届いていた。ここ何年か、私はメールで友だちと新年のあいさつをしていたので、ほとんど自分宛にくるものはなかった。それでもこれまでの恒例で、私が家族の年賀状を振り分けていた。（お父さん、お母さん、お父さん、お父さん、お父さん……。）どんどん振り分けていく。ふと、自分宛の年賀状があることに気が付いた。誰からだろうとよく見ると、それは優子からのものだった。私の好きなアニメのキャラクターが、そっくり丁寧に描かれ、「私の大好きな美香子へ、友だちになってくれてありがとう。今年もよろしくね。」と書かれていた。思わず年賀状を振り分ける手が止まってしまった。年賀状を見ると、優子が私のためにキャラクターを選び、一生懸命イラストを描く姿が目に見えるようだった。

しばらくすると「優子から年賀状がきたよ。私の好きなアニメのキャラクターが描いてあったけど、今さら遅いよね。」と、真希たちからメールがきた。「そうだよね……。」と、私は反射的に文字を打ち始めたが、ふと頭を上げた。そして、携帯の画面に視線を落として一文字一文字ゆっくりと文字を消去した。私は深呼吸を一つすると、真希に思い切って電話をかけた。
「私、優子にあやまりたい。ねえ、優子を誘ってこれからもう一度初詣に行かない？」
私の心臓はどきどきと波打っていた。しばらく沈黙が続いたが、
「また行くのかぁ。でも美香子の言うとおりかも。」
という、真希のちょっと照れたような声が返ってきた。

「優子、私たちだけで初詣に行ってごめんね。」
みんなで優子に素直にあやまった。優子は黙って首をふった。私はバッグから一枚の年賀状を取り出すと、
「優子、本当にごめんね。住所を書く時間もなかったんだけど。」
と、消えそうな声でやっと言った。優子は、年賀状に描かれた私と優子の似顔絵を見ながら、
「美香子、ありがとう。」
と言って、にっこり笑って両手で受け取った。優子の笑顔を見たら、何だか急にうれしくなった。メールもいいけど優子の顔見てちゃんと言えてよかった。
「じゃあもう一度初詣に出発だぁ。」
と、真希が元気に言った。みんなが顔を見合わせて笑顔でうなずいた。

次の日から、由美とはあまり話をする機会がなかった。仮入部が始まり、いつも一緒にいる友だちが自然と、部活動の仲間になっているような気がしてならなかった。バスケット部はクラスで私一人、なんだか一人ぼっちのような気がした。

今日も仮入部の時間になった。みんな、楽しそうに活動の場所に行った。私も、一人でバスケット部に行った。すると、今日来ている一年生は三人だけだった。昨日は六人いたのに、ちょっとびっくりした。私以外の二人は、小学校が同じらしく仲良くやっていた。その隙間に入っていくのは不自然だし抵抗もあった。一人ぼっちの部活動で悲しくなってきた。

「ただいま。」と家に帰ってきた雅恵に、母が「仮入部はどうだったの。」と聞いた。「うん、楽しかったよ……。」と答えた。「バスケット部は練習が厳しいの?」と聞く母に雅恵は、「実は、今日三人しか一年生がいなかったの。」と自分からバスケット部のことをどんどんしゃべり始めた。「バスケット部やめて、ソフト部に行こうかな、友だちもいないし。」とつぶやき、自分の部屋に入っていった。

本入部前日になった。明日は入部届を提出しなければいけない日だ。私は迷っていた。バスケット部にしようか、ソフト部にしようか。由美に、私もソフト部に入るといったら、友だちでいられるかなとも考えはじめた。

そして部活動に行く前に、思いきって由美に話しかけた。

「ねえ由美、私、今日ソフト部に行くわ。バスケット部はやめる。友だちもいなくて、つまらないし、由美とはこれからも一緒にいて仲よくしたいから……。」

すると、由美は顔をくもらせて、ちょっとさびしそうな顔になった。しばらく沈黙が続いた後、由美は私に対して、

「雅恵とは、これからも大切な友だちだよ。部活動が違うからといって勘違いしないで。私、雅恵にはバスケットをこれからも頑張ってほしいと思っている。バスケットでがんばっている雅恵が一番好きだよ。」

と言って、ニコッと笑いながら校庭へと走って行った。

私は意外な由美の言葉に、ハンマーで頭を打たれた気持ちがして、走り去る由美のうしろ姿を見つめていた。

本入部の日、雅恵はバスケットコートに立っていた。大きな声を出し、ボールを夢中になって追った。汗をたっぷりとかき、休憩の時間、その汗を拭きながら外のソフト部のグランドを見つめると、素振りで汗をかいている由美のほほえみが返ってきた。

10　仮入部

「おはよう雅恵！」と大きな声が、後ろから聞こえた。由美の声だ。由美とは、小学校からの友だちで中学校に入学してからも、ずっと仲良くしている。最近の話題というと、いつも部活動の事ばかり話をしている。

「ねえ雅恵、明日から仮入部よね、どこへ行くか決めた?」

「うーん、まだ決めてない、由美は?」

「私は、ソフトボール部に行こうかな、雅恵も一緒に行かない。」

「へー、ソフト部おもしろそうね。」

雅恵は、ソフト部に興味はあったものの、実はバスケットボール部に入りたいと秘かに決めていた。小学校では、ミニバスをやっていてキャプテンも務めていた。中学校でももちろん続けようと考えていた。由美も一緒にやっていたのに由美は、どうしてソフト部なんだろう……と雅恵は、不思議に思った。

授業中雅恵は、部活動のことばかり考えていた。先生の声もうわの空、ノートもあまり書いていない。ぼーっとした一日になってしまった。帰りの会、担任の先生から、「今日から仮入部です。しっかり活動しましょう。」とお話があった。挨拶が終わった後すぐ、由美から「ねえ、ソフト部に行かない。」と誘われた。バスケット部に行こうと考えていた雅恵は、由美からの誘いの声に、

「ごめん、バスケット部に行こうと考えていたの。」

と言ってしまった。

「そうか、やっぱりバスケット部か。ちょっと残念。」と、さびしそうな表情が瞬間、由美の顔をよこぎった。

雅恵は、由美の誘いを断るように「バスケット部に行くね。」と言いきった。バスケット部の練習に参加したが、由美の誘いを断ったことがずーっと心にひっかかっていた。しかし、先輩たちは優しく教えてくれて、部の雰囲気もよかった。バスケット部に入部したい気持ちはますます強くなってきたのも事実である。

下校途中、由美が「バスケット部どうだった?ソフト部は楽しかったよ。」と雅恵に言った。雅恵は、「よかったね。バスケット部も楽しかったよ。」と答えた。由美は「雅恵、私ね、オリンピックで、ソフトボールを見てすごく感動したの。中学に入ったら、絶対ソフト部と決めていたんだ。」と話をした。「別々の部になると、なんかさびしいね。」と、由美の残念な気持ちが顔に出ていた。わたしは、複雑な気持ちで、由美の話を聞いていた。

１１　心のパス交換

「何とかしてよ、副部長。」
　みんな簡単に言うが、僕に何ができるというんだ。勇人とは、特に仲がよかった訳でもないし、ただ副部長であるというだけで…。

　僕は、中学校入学と同時にバスケットボール部へ入部した。それまでバスケットの経験はなかったが、部活動見学での先輩方の姿がかっこよく見えたことが、大きな理由だ。背が高く、ゴールリングに手が届きそうな姿にあこがれ、一人で入部を決めた。
　それから、部活動はほとんど休まなかった。走り続けることができる体力は付いた。いつもボールを手元において触れていたせいか、ボール扱いもうまくなったと思う。しかし、背が高くない、中学校からバスケットボールを始めた僕は、レギュラーにあと一歩届かなかった。
　三年生が引退した七月、顧問の井上先生は副部長に僕を指名した。
「康太はいつもよく頑張っている。声も出ているし動きもいい。副部長としてバスケットボール部の要（かなめ）になって欲しい。」
　僕は予想外の指名にドキドキした。何か自分が認められたような気がした。できるだけチームをまとめようと、今まで以上に周りへ声を掛け続けることに努力した。もちろん勇人にも……。

　勇人は、二年生の四月に転校してきた。もともと口数も少なく、友達を作ることが苦手なタイプなのか、いつも一人でいることが多い。しかし、バスケットボール部へ入部すると、背がとても高い勇人は、すぐに試合に出るようになった。熱中すると乱暴さがプレーにも出るため、ファールの回数が多く、ベンチに戻される時間も多かった。しかし、練習を重ねることで、ゴール下で試合を決めるような働きもするようになっていった。
　新人大会目前の九月になる頃には、勇人は部長の直也と共にチームの中心として、競い合うように練習に打ち込んでいた。ゴール下で、高く跳ぶ二人の姿は、まるで、一年生の時にあこがれた先輩方のようだった。僕にはないものをもっている二人が、いつもまぶしく見えた。

　金曜日の放課後の練習でも、部長の直也は、巧みな体の使い方で勇人のプレーをうまく抑え続けていた。直也はまさしくこのチームのエースだ。負けずに勇人

も、ますます必死になって、ボールを取りに行った。
　その時だ。
「リバウンドッ！」
「あっ！」
　勇人はゴール下でのボールの取り合いの中、空中で体制を崩し、誤って直也の右足の上に着地した。直也は表情をゆがめて、その場に座り込んだ。（まずい！）僕は直也に駆け寄った。痛みからか、直也の顔から血の気が引いていくのがわかった。
　直也の様子を見た周りのチームメートたちは、大きな声を上げながら、勇人に迫った。
「おまえ何やっているんだ！よく、考えろよ！」
「大丈夫か、直也！」
「謝れよ、勇人！」
「……。」
　勇人は黙り込んだ。
「黙っていないで、何とか言えよ！」
　次々と迫る言葉に答えられない勇人は、
「……、わざとじゃない！」
　吐き捨てるように叫ぶと、体育館から走り去った。
　勇人は、あやまることができなかった。そう、確かにわざとではない。バスケットボールではよくあることだ。（一言謝れば済むのに……。）でも、勇人はそれができず、これまでも部活動の中でトラブルになることがよくあった。
　勇人は土日の部活動だけでなく、月曜日は学校にも来なかった。足を踏まれた直也は、右の足首を骨折していた。チームは、柱を二本失った。
　直也と勇人の二人がいないチームは、今までと全く違うチームとなっていた。練習の中でも、懸命にボールを追い、走り回るが、ゴール下での守備が弱いため、簡単に失点が続く。二週間先の地区新人大会を考えると、暗い気持ちになった。

　勇人については、意見が分かれた。
「勇人、出てくればいいのに。わざとではないのだから。」
「そうだよ、協力するからさ。何とかしてよ、副部長。」
　みんな勇人を責めておいて、今さら簡単にいって欲しくない。
「『おまえなんかいらない、やめちまえ！』は言い過ぎたかな。」
「でも、まずケガをさせたやつが謝るべきだろう。いつも、勇人はあやまらない

よな。」
「カッとなると、試合中だって、何をするかわからないからな。」
「それに、別にいいんじゃないか、休みたいヤツは休ませておけば。他の誰かが試合に出られるわけだし……。」
　勇人に対しての厳しい声が続いたが、かばうような言葉が浮かばなかった。みんなの言うとおりだ。確かに、放っておいて、いいのかもしれない。そうかもしれない。わざとではなくても、悪いのは勇人だ。
　でも、何かすっきりしない、勇人のことが頭から消えない。
（僕に何とかできるだろうか。）みんな勝手なことを言うけれど、助けて欲しいのは、僕の方だ。柱を２本失ったチームを、僕が引っ張っていけるだろうか。その上、勇人のことまで！僕には直也のようにチームをまとめることも、勇人のように高く跳ぶこともできない……。考えれば考えるほど、結論が出ない。打っても打っても、入らないシュートのようだ。
　勇人は火曜日も学校を休んだ。
　そんな時、井上先生からも、声を掛けられた。
「部長の直也が休んでいて大変だが、一緒にチーム作りをがんばっていこう。直也は明日退院できるそうだ。それから、先生も声を掛けているんだけれど……、勇人についてもよろしくな、康太！」

　気持ちの晴れないまま、水曜日の練習後、直也を見舞った。右足の膝から下をギブスで固定していた。痛々しい姿に、何を言っていいのか分からず、取りあえず今のチームや勇人の状況、練習の様子を直也に伝えた。
　「新人大会に向けて、やっといいチームになってきていたのに……、なかなか思うようにはいかないな……。」
　直也は、ベットの上で右足首を見つめながら、少し残念そうな顔になった。
「実は昨日、勇人がお母さんと一緒に謝りに来たんだ。勇人、泣いてたよ。あやまろうと思っていたけどすぐにあやまれなくて悪かったって。」
（ちゃんと、謝りにきたのか……、よかった。）僕はびっくりしたと同時に、少し安心した。直也は続けた。
「本当は僕自身ケガをした時、悔しくて、どうしていいか分からなかったんだ。試合も近いのにこの足、どうなるだろうって。それに、勇人を守ることもできなかった。あの雰囲気ではあやまれないのは、無理もないよな。」
「勇人を守る？」
「みんなに責められる勇人の立場になってみろよ。」

　部長の直也らしい言葉だ。僕には、ケガをさせた側である勇人に対して、そんな見方はできなかった。
「あ、それに勇人のお母さんも、康太に感謝していたよ。自分から声を掛けられない勇人は、いつも周りに声を掛けている康太を尊敬しているんだって……。」
（僕を、尊敬……。）胸の奥の方が、ドキンと鳴った。僕の応援の声が、僕の出した心のパスが、ちゃんと勇人に届いていたのだ。それなのに僕は……。
　直也は、少し間を空けて、もう一言付け加えた。
「康太はすごいな。副部長を任せた井上先生も、勇人と同じような気持ちなんだと思う。しばらくの間、チームと……、勇人を頼むよ、康太！」

　帰り道、いつの間にか暗さが増した夜空を見ながら考えた。
　少し乱暴で、自分の気持ちを言葉でうまく表現できない、トラブルになることが多い勇人。でも、バスケットボールが好きで、チームの力になろうと、懸命に努力をしていたのではないか。直也は直也で、ケガをし、悔しい思いを抱えながら、チームのことや勇人のことを考えていた。二人の思いを強く感じられた。僕にも何かできるような気がしてきた。
　きれいなシュートが、スパッとリングの入るような、そんな爽快感を感じた。

　勇人は、今は一人で苦しんでいるのだろうか。とりあえず、電話を手にする。部名簿の名簿に目をやり、電話番号を打ち込み始めた……。

12　後味の悪い再会

「あ、奈緒、久しぶりじゃん！元気だった？」
「うん！元気だったよ！彩香、なんか髪伸びたね。」
　奈緒は高校２年生。ある日、部活動が終わって学校から帰宅する途中、奈緒は幼なじみで同い年の彩香とばったり街中で会いました。彩香は、奈緒と同じ中学校出身で、奈緒とは別の高校に通っています。

　テニス部に所属している奈緒は、真面目で控えめな性格です。他人から頼まれたら嫌とは言えず、誰に対しても笑顔で振る舞うので、まわりの友達は奈緒のことをとても信頼しています。
　一方、彩香は、活動的で、常に自分が場の中心、話題の中心でないと気がすまないタイプです。また、相手が先生であろうと誰であろうと、思ったことを何でも口にしてしまいます。奈緒は、彩香自身がいつも話題の中心にいないと気がすまない様子や、人の悪口や弱みを遠慮なくストレートに言う態度に「もっと他の言い方できないのかなぁ……。」と何度も思ったことがありました。
　彩香に会った時、奈緒は
「今日はこのあと、家で見たいテレビもあるし、長話にならないようにしよう。」
と思いました。

　奈緒の予想どおり、彩香は、奈緒の近況などはまったく聞かずに、自分が通っている高校がつまらないこと、付き合っている男の子と最近ケンカばかりしていること、両親が自分の生活に干渉してくることなど、愚痴を話し始めました。
「あぁ、中学のころと全然変わってないな。」
と心の中でため息をつきながら、奈緒は、話に興味を持っている振りをして、精一杯の笑顔で彩香の話を聞きました。しばらくして、奈緒は
「じゃあ、私これで……。」
と話を切り上げようとしましたが、彩香は
「ねぇねぇ！聞いてよ！この前さぁ。」
とたたみかけるように奈緒の言葉をさえぎって話を続けます。こうなると、奈緒は再び笑顔になって、彩香の話を聞くだけでした。

　気が付くと、彩香と会ってから１時間近くが経っていました。
　彩香は相変わらず自分の話ばかり続けています。しだいに奈緒のイライラはつのっていき、その表情からは、当初の笑顔が消え、「へぇー。」「そうなんだぁ。」という相づちの回数も

減っていきました。
「そもそも、何で私が自分の時間を犠牲にしてまで、親友でもない彩香の話にここまで付き合わなきゃならないの？愚痴とか聞いていてもちっとも楽しくない。だいたい私っていつもそう。相手に気を遣って、聞き役で、損してばかり……。」
　そんなふうに考えていたら、奈緒のイライラは、だんだん怒りの気持ちに変わっていきました。そして、彩香の話に反応すらしなくなってしまいました。一方的にしゃべっていた彩香も、奈緒の様子がおかしいことに気付き始めました。

「奈緒？どうしたの？」
奈緒は、彩香をキッと睨んで、今まで溜まっていたうっぷんを晴らすように、
「彩香っていつもそうだよね！全然相手のことなんか考えないで自分勝手で。私にだって私の都合があるんだよ！何で私の話は聞いてくれないの？だいたい中学の頃だって、みんな『彩香ってウザいよね。』って言ってたけど、そんなふうに言われても当然だと思わない？だって、彩香のそんなところが悪いんだから！」
と一気にまくしたてました。
　奈緒が思いを吐き出したあと、しばらくの沈黙が２人を包み込みました。やがて、彩香の体が小刻みに震え始め、目から大粒の涙がこぼれました。言いたかったことを言ってしまった奈緒も、「ハッ！」と後悔の気持ちに襲われました。
『彩香ってウザいよね。』と奈緒の仲間たちが中学校時代に語っていたことは、絶対に彩香には秘密だからと、みんなで約束していたことだったのです。
　彩香は、「ごめん……。」と一言だけ言って、下を向いたままくるりと奈緒に背を向けて、その場を立ち去っていきました。
夕闇が迫って来て、家路を急ぐ人と車の流れが慌ただしくなり始めた街角で、奈緒はいつまでもたたずんでいました。

　奈緒は、その夜、ふとんに入っても、ずっと眠ることができませんでした。

Let's think!

○　奈緒と彩香の、それぞれの問題点は何だと思いますか。
○　再会した日、どうしていれば、２人はお互いにさわやかな気持ちで別れることができたと思いますか。
○　良好な人間関係をつくるために、あなたが心掛けていることは何ですか。

13　誠の心　～渋沢栄一物語～

埼玉の偉人、渋沢栄一は、天保11年（1840）、武蔵国榛沢郡血洗島（現在の深谷市）の豪農で父市郎右衛門・母えいの長男として生まれました。渋沢家は、代々農業を営んでいましたが「名字帯刀」を許され、養蚕や藍玉づくりとその販売のほか、雑貨屋・貸家業も兼ねていました。特に母親のえいは恵まれない人々の世話を積極的にする人物で、地域の人々から厚い信頼を得ていました。

栄一が幼小の頃の話です。近くに身寄りもなく、長い間重い病気にかかっている若い娘が住んでいました。病気がうつっては大変だと、誰も娘のもとを訪れる人はいませんでした。そんな中、えいは、一人暮らしのこの娘を気の毒に思い、毎日野菜などを運んだりして彼女の面倒を看ていました。

ある日のこと、えいが栄一を連れて娘の様子を見にいこうとすると、
「お母さん。僕は嫌だよ。いかねぇよ。」といい、栄一は立ち上がりませんでした。
「そんなこと言わずに一緒に行くべぇ。あの娘が心配だから。」
と言って、栄一の手をとり出かけていきました。途中、母は、
「人は誰でも好きで病気になっている訳じゃねんだよ。病気になると非常に心細くなるのが人間の常というもの。あの娘は身寄りもなく、一人で病気と闘ってるんだ。近くに住んでいる私たちが力にならなくて誰がなるんだい。」
と言って栄一の手をギュッと握りました。
　家に着くと娘は、一人でぽつんと薄暗い部屋の中に座っていました。
「少しだけど、野菜をもってきたよ。気分はどうだい？　何か心配なことはあるかい？　早く元気になるんだよ。」
というと、娘はうれしそうな顔をして目に一杯涙を浮かべました。
　ある日、娘は気分がよかったので、いつも親切にしてもらっていることへのお礼にと『ぼたもち』を作って栄一の家を訪ねてきました。
「おかみさん、私の作ったぼたもちなんだけど、食べてくんない。」
「てぇ、わざわざ作ってくれたんかい？　そんなに具合がよくなっちゃよかったね。ごちそうになるべぇ。」

　えいは、娘と笑顔で話をしながら美味しそうにぼたもちを食べていました。栄一は、障子のかげからそっと二人の様子を見ていましたが、娘が帰るとすぐに、母に向かって大声を出しました。
「お母さん、そんなもの食べて病気になったらどうするんだよ。」
「てぇ、おまえはまだそんなことをいってるんだ。お医者さまも、心配ないとおっしゃいましたよ。ほら、こちらへ来てお前も一つもらって食べな。」
　えいは、まだ栄一が人間として一番大切なことを理解できていないのが悲しくてなりませんでした。

　この頃、村の鎮守の鹿島神社の境内には、欅の大木があって、その木の洞の中に井戸がありました。この井戸水は、病気によく効くといわれ、この水を使って共同風呂が作られていました。この風呂には、村の人だけではなく近くの村からも病気を治そうと、多くの人がやってきました。
「お母さん、また行くんかい。」　栄一は、母に声をかけました。
「ああ、そうだよ。あの娘をさっぱりさせてやろうと思ってね。」と答えると、えいは出かけていきました。
　えいと娘が一緒に共同風呂にやってくると、それまで風呂に入っていた人たちは、潮が引くようにいなくなりました。中には、
「おえいさん、偉いね。今日もその娘さんの入浴の手伝いかい。余裕のある家はいいやね。」と皮肉をいいながら帰る人もいました。えいはそんなことは気にしないで、
「さあ、背中を流すべ。きっとよくなるよ。さっぱりするべ。」
と娘の背中を流し始めました。
「おかみさん……、すみません……。」
と言って、娘は大粒の涙を流し喜びました。こんな時娘は、本当の「人情の温かさ」を感じていました。

　このような母の姿を見て育った渋沢栄一は、のちに「近代日本資本主義の父」として日本経済の発展に寄与しただけでなく、多くの社会福祉事業にも力を尽くしたのでした。

14　見えない相手

高校二年生になって、クラス替えがありました。仲の良い友達は、ほとんど他のクラスになってしまいました。あまり自分から話しかけない私は、いつもクラスの中で一人で過ごしていました。そんな私にＡ子が声をかけてくれてから、クラスの中に打ち解けていくようになりました。

一人で過ごしていた時と比べ、クラスメートとのおしゃべりや家に帰ってからのメール交換は、とても楽しい時間でした。友達付き合いの上手でない私にとって、メールでのやり取りは、直接顔を見て言わない分、将来の夢や好きな人のことなど、簡単に色々なことを打ち明けることができました。そして、友達に気持ちを伝えることが心から楽しいと思いました。また、メールのやり取りの中で、「プロフ」や「掲示板」の存在やアクセスの仕方も教えてもらいました。

ある日、いつものようにみんなとおしゃべりをしていた時、「Ｂ子最近調子に乗っているよね。」と誰かが言うと、Ａ子が「みんなで掲示板に、Ｂ子について思っていることを書き込もうよ。」と言い出し、みんなで書き込むことにしました。

私は家に帰ってから掲示板をのぞき込むと、実名は出ていませんでしたが、あきらかにＢ子への悪口や非難とわかる内容が、多数書かれていました。私も、みんなとの約束どおり、掲示板に書き込もうと、文を打ち込みはじめましたが、Ｂ子の顔を思い浮かべると、どうしても書き込みができず、みんなとの約束を果たせませんでした。次の日、みんなの話題は、Ｂ子と掲示板のことでした。私は適当に話を合わせながら、おしゃべりに参加していました。

数日後、友達に話しかけてもみんなが私を無視するようになり、ひそひそと悪口を言われるようになりました。そのことについてＡ子に相談しても、「あなたにも原因があるんじゃないの。」と冷たく言われてしまいました。また携帯メールには、何通もの嫌がらせメールが届きました。それも全部違うメールアドレスから。「このままじゃ、自分が壊れる。」と思い、アドレスを変えしばらく誰にも教えませんでした。しかし、その次に襲ってきたのは、私のプロフへの書き込みでした。以前、友達と交わしたメールでの秘密の話や、Ｂ子のことを掲示板に書いたのも私であると、そこに書かれていました。「私の知らない間に、何人の人がこれを見たのだろう。」そう思うと、怖くなりすぐに自分のプロフを削除しました。「もう誰にも本当の自分の気持ちなんか伝えない。」と一人で泣きました。

先生に言ったら「ちくった。」と言われるし、友達に打ち明けても、また裏切られるのが怖いし、親には心配かけたくありません。なにより自分自身が、被害者であることを受け入れたくありませんでした。私は一人心の中でつぶやきました。「気にしないでいこう。私が悪いんじゃない。強くなろう。耐えられる限り自分で飲み込んでしまおう。」しかし、実際そんな急に強くはなれませんでした。最後は先生に打ち明け、表立った嫌がらせはなくなりました。普通の喧嘩なら、直接あやまったり話したりして解決できるけど、ネットを通しての見えない相手では、何もできません。メールやネットでは、相手が一人なのか十人なのかも知ることができません。またネット上で、周りから作り上げられた知らない自分が、独り歩きしているのではないか、という恐怖におののきます。

あの時、心の中で感じた冷たい痛みを今でも思い出します。

（埼玉県立高等学校　生徒作文）

Let's think!

○　なぜ、「私」は掲示板への書き込みができなかったのでしょうか。
○　自分のプロフを削除したときの「私」はどのような心境だったのでしょうか。
○　インターネット上で、不特定多数の人が参加できる「プロフ」や「掲示板」の問題点について、考えてみましょう。
○　「ネットいじめ」をなくすには、どうしたらよいのでしょうか。

【参考：相談・通報窓口】　～一人で悩まず相談を！～

1　いじめ相談に関するもの

（1）　県立総合教育センター　よい子の電話教育相談（心のケア）
子ども専用　【0120-86-3192】
保護者専用　【048-556-0874】

（2）　法務省　人権擁護局（人権相談）
【http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken113.html】（インターネット）
【0120-007-110】（子どもの人権110番）

（3）　子どもスマイルネット（埼玉県子どもの権利擁護委員会　電話相談）
【048-822-7007】

2　インターネットを使った犯罪に関するもの

（1）　けいさつ総合相談センター
【#9110　又は　048-822-9110】

（2）　埼玉県警察：埼玉県警察 HP「サイバー犯罪対策」
【http://www.police.pref.saitama.lg.jp/kenkei/110_soudan/joho110/cyber/cyber_joho.html】

埼玉県教育委員会「ネットいじめ シャット・アウト!」カードより

せいろくのゆうき

（「彩の国の道徳」きょうもげんきに　埼玉県教育委員会）

正しいことができる強い心をもとう

人としてやってよいこと、社会通念としてしてはならないことをしっかりと区別したり、判断したりする力は、児童が幼い時期から徹底して身に付けていくべきものである。しかし、人は、悪いことと知りつつも周りに流されてしまったり、自分の弱さに負けたりしてしまうことも往々にしてある。そこで、この時期に善悪の判断をしっかりできるようにするとともに、よいと思ったことは、進んで行う気持ちを育てたい。

本資料は、自分よりも大きく、しかも多人数であるという不正に対して、しりごみする弱い主人公が、どんな気持ちからそれを乗り越え、正しいことを言うことができたのかを考えさせることで、勇気を持って正しいことを主張することの大切さに気づかせることのできる資料である。

【いじめ問題予防の視点】
主人公の勇気を持って行動できたときのすがすがしさにふれさせることで、身の回りのいじめ等に対して、いけないことはいけないと主張できるようにする。

ね　ら　い

- よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う態度を育てる。

〔内容項目　1－（3）〕

授業の流れ

- いじめられている子を見ても、注意するのをしりごみするせいろくの挿し絵を見て話し合う。
- 本多静六について紹介する。

- 主人公「せいろく」の心の変化について話し合う。
  - ⑴ いじめられている女の子を見たせいろくは、どんな気持ちから「たすけてやろう」と思ったのだろうか。
  - ⑵大きな子たちを見て、せいろくはどう思っただろう。
  - ⑶「よわいものいじめはよせ」と言ったせいろくは、どんな気持ちからこのような行動がとれたのだろうか。
- 勇気を持って正しいこと主張することの大切さに気付かせる。

- 友達の意見と自分の考えと比べながら聞くことができるようにする。
  - ⑴ 正しいことを主張しようとしたせいろくの気持ちに気付かせる。
  - ⑵かわいそうだと思うが、しりごみしてしまうせいろくの気持ちに共感させる。
  - ⑶正しいことを主張するのは、勇気が必要であること、せいろくが心の底から満悦していることに着目させ、正しいことを主張したときの気持ちよさを十分に味わわせる。

- 心のノートＰ24「ゆうきを出して」を聞く。

他の教育活動との関連

- 人権教育との関連（人権作文・標語など）を図り、正しいことを進んで実践しようとする態度を育成する。

がんばって

（「彩の国の道徳」きょうもげんきに　埼玉県教育委員会）

友だちの気もちを考えて

よりよい友達関係を築くには、相手の立場を理解し、認め合いながら生活していくことが必要である。低学年の時期は自己中心的な行動や相手の気持ちをよく考えないで発言したことによって、友達を傷つけてしまうことや、それがトラブルに発展してしまう事例も少なくない。そこで、友達と仲良くすることの大切さを実感させ、友情をはぐくめるようにしたい。

本資料では、恥ずかしさから大きな声が出せず困った顔をしている友達を見て、応援しようとする主人公の心の変化に着目しながら、相手の気持ちを考えた言動が友情を築くために大切であることを考えさせたい。

【いじめ問題予防の視点】

友達と強い信頼関係を築くためには、友達の気持ちや立場に立って応援することの大切さを実感させ、自らも、勇気をもって困っている友達に進んでかかわろうとする心情を育てる。

ね　ら　い

● 友達の気持ちをよく考え、助け合って生活していこうとする態度を育てる。

内容項目［2－（3）］

授業の流れ

● 困っている友達に、どんな言葉をかけたりどんなことをしてあげたりしたらよいだろうか。事前アンケートを活用し、自分の経験から、現在どう考えているのかを知る。

↓

● 「たけし」の心の変化と行動から、思いやりについて話し合う。

⑴困った顔をしているえりを見て、たけしはどんなことを考えているだろうか。

⑵かなこが「だいじょうぶだよ。」と声をかけたとき、たけしはどんなことを考えただろうか。

⑶たけしは、どんな気持ちから「がんばって」と声をかけたのだろうか。

●友達に助けられたことや助けたことを、そのときの気持ちを合わせて書いたり発表したりして。自分を見つめる。

⑴友達が困り果てている姿を見て、困惑しているたけしの気持ちに共感させる。

⑵えりの気持ちに寄り添って声をかけたかなこの行動で、えりの心に変化が現れたことと、自分も応援している気持ちを伝えようとするたけしの行動について話し合う。

⑶ 応援する気持ちを言葉で表せた時のたけしの勇気と喜びに共感させるとともに、えりの「ありがとう」から、たけしとえりの信頼関係が深まったことを感じさせる。

↓

● 心のノートＰ46「友だちパワーをあつめよう」を書く。

他の教育活動との関連

● 朝の会や帰りの会で、友達からもらった嬉しい言葉や助けてもらった行動などを発表したり、掲示したりする。

かなちゃんへの手紙

（「彩の国の道徳」みんななかよし　埼玉県教育委員会）

言葉のもつ力

人と人とのつながりは、よりよい社会を築いていくために不可欠であり、そのつながりは真心のこもった言動によって支えられている。ところが、中学年の児童は言葉に対して無頓着な面があり、自分が言われると傷つくような言葉でも、何気なく口にしたり文字にしたりしてしまう。児童が言葉の重みを理解し、相手を大切にした言動ができるようにしていく必要がある。

本資料は、自分の苛立ちから友達に悪口の手紙を書いてしまった主人公が、相手のことを考えた言葉の大切さに気づき、手紙を書き直してみようとする資料である。言葉のもつ力を認識し、相手のことを思いやる言葉かけがいかに大切かをじっくりと考えることができる資料である。

【いじめ問題予防の視点】

相手を尊重した言葉の大切さに気づく主人公を通して、相手の気持ちを考えず自分本位な言動で、相手を傷つけるようなことなく、真心を持って人に接しようとする態度に結びつける。

ね　ら　い

● 相手を尊重した言葉の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接し、言葉に気をつけて生活していこうとする態度を養う。［内容項目2－（1）］

授業の流れ

● 心のノート「人とともに生きよう」（p.34・35）を読み、言葉について話し合う。

↓

● 『かなちゃんへの手紙』を読み、話し合う。

⑴机に中から紙を出し、頭にうかんだ言葉をそのまま書いているわたしは、心の中でどんなことを思っていたのだろう。

⑵手紙を持ってかなちゃんの机の前に立った時、わたしは何を考えていたのだろう。

⑶お母さんの言葉を聞き、泣きながら手紙を細かくちぎったわたしは、どんな気持ちだったのだろう。

● 自分の学級の中など、自分の周りで増やしていきたい言葉について考える。

⑴自分の苛立つ気持ちから、悪いこととは分かっていても、悪口の手紙を書いてしまう主人公の気持ちを共感的に理解できるようにする。

⑵手紙を机に入れることに迷う主人公の心の葛藤を考えることで、言葉の重みについての多様な考えを出し合えるようにする。

⑶母の言葉から、相手を尊重した言葉の大切さに気づく主人公の心の内が捉えられるようにするとともに、その後主人公がどのような手紙を書いたかにも触れ、人を大切にしていこうとする態度に結びつけられるようにする。

● 自分の生活を振り返り、言葉に気をつけて生活していこうという思いがもてるようにする。

↓

● 言葉の大切さについての教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

● 子どもの日常生活で見られる温かな言葉を、帰りの会で話題にしたり、学級の道徳コーナーに掲示したりして、言葉に対する子どもの感性を深め、意欲を高められるようにする。

わたしとのぞみ

（「彩の国の道徳」みんななかよし　埼玉県教育委員会）

本当の友達だからこそ

中学年の児童は、気の合う者同士で仲間をつくって楽しもうとする傾向がある。この傾向は、友達を大切にする気持ちを育む反面、その関係に縛られて自分の意見を言えなくなったり、善悪の判断が鈍ったりすることにもつながる。児童が、単に仲がよいだけではなく、互いに信頼し、高め合っていける友達関係を築くことができるようにしていく必要がある。

本資料は、親友のぞみの行動をただ見ていただけの主人公が、姉と友達の関係を見て、自分も行動してみようと決意する資料である。本当の友達だからこそやれることや言えることがあり、それが友達として互いを高め合っていくためには必要であることに気づくことができる資料である。

【いじめ問題予防の視点】
本当の友情について気づく主人公を通して、自らの友人関係を見つめ直し、友達がいじめたりいじめられたりしているのに見たときは、注意しようとする態度に結びつける。

ね　ら　い

●　友達のことを考え、互いに理解し、信頼し、助け合いながら、友情を深めていこうとする態度を育てる。　［内容項目2－（3）］

授業の流れ

●「友達」とはどういう人のことをいうのか、互いの考えを発表し合う。

↓

●『わたしとのぞみ』を読み、話し合う。
⑴物をかくし続けるのぞみを、ただ見ているだけのわたしは、心の中でどんなことを思っていたのだろう。
⑵電車の中から動く景色を見ながら、わたしは何を考えていたのだろう。
⑶わたしが思い切ってお姉ちゃんに相談しようと決意したのは、どのような思いからなのだろう。

●自分のこれまでの生活の中で、友達から注意してもらったり、友達のことを考えて声をかけたりしてよかったなあと思った経験について考える。

⑴よくないこととわかっていても、友達だから何も言えないという、主人公のもやもやとした気持ちに共感できるようにする。
⑵友達に注意する姉と自分とを比べて、悩み、揺れ動いている主人公の心の葛藤に思いを寄せ、多様な考えを出し合いながら、深く考えられるようにする。
⑶「友達だからこそとやらなければと決意する主人公の心の内を捉えらえ、本当の友達とはどういう関係か考えられるようにする。

●自分の生活を振り返り、友達だからこそ注意し合える関係が大切であり、友達と注意し合おうとする態度に結びつけられるようにする。

↓

●相田みつをの「その人」の詩を聞く。

他の教育活動との関連

●学級活動で「友達のよいところを見つけよう」という活動を行い、記入したカードを掲示する。
●帰りの会で友達を思って行動している児童を定期的に取り上げ、互いを認め合えるようにする。

わたしって何

（「彩の国の道徳」夢にむかって　埼玉県教育委員会）

わたしは宝物・みんな宝物

生命はかけがえのない大切なものである。高学年では、生命が親から子へ、そして孫へと受け継がれていくことや多くの支え合いの中で生命がはぐくまれていることもわかるようになる。互いの生命を考え大切にすることは、相手の存在を認めることで人は必要とされることに喜びを感じる。

本資料では、自分が何気なく使っていた言葉で傷つき、存在価値を否定され深く傷つく主人公が、自分を必要としてくれている母親の言葉に勇気づけられ、力強く生きていこうとする資料である。かけがえのない生命を尊ぶ気持ちをだれもがもち、自分だけでなく互いに大切にしていこうという気持ちをはぐくみたい。

【いじめ問題予防の視点】
・いじめは相手の存在、尊厳を否定するものである。自他の生命のかけがえのなさを感得させ、自己を見つめ、相手を否定するような言動をしないようにする。

ね　ら　い

● 生命について考え、自他の生命を尊重し、それぞれの親から受け継いだ生命を互いに大切にしようとする態度を育てる。　［内容項目3－（1）生命尊重］

授業の流れ

● 「この世から去れ」という言葉を聞いてどんな感じがしますか？

↓

● 幸恵の気持ちを中心に「生命」について考えていく。
⑴「友達の悪口や人をけなしたりするようなことは言わない。」とお母さんにどんな気持ちで言ったのだろう。
⑵何気なく使っていた「この世から去れ」という言葉が書かれ手紙を見てどんなことを考えたのだろう。
⑶「わたしがいてよかった？」に対するお母さんの返事を聞いてどんなことを考えたのだろう。
●この学習を通して考えたことを書き、話し合う。

⑴「人を傷つける言葉」と「ギャク」を自分勝手に結びつけ使ってしまう幸恵に共感させる。
⑵言葉は人を傷つける道具になり、悩む幸恵の心情を考えることで、相手に対する言葉かけ、自分の存在価値、生命についての多様な考えを引き出すようにする。
⑶人から自分の存在が認められることは、何にも代え難いことだということ、そして、親からもらった生命の大切さをしっかりと押さえる。
●自他の生命を大切にすることは相手を尊重し、大切にすることでる。書く活動を通し、日常の言動をじっくり見つめ、考えさせる。

↓

●心のノート「今生きているわたしを感じよう」を聞く。

他の教育活動との関連

● 理科「メダカの誕生・人の誕生」で自分を含め、次の世代に受け継がれていく動物や植物の命を調べ、神秘さを感じとらせる。

あなたも同じ・・・

（「彩の国の道徳」夢に向かって　埼玉県教育委員会）

いじめを許さない！後悔しない！

いじめには、いじめている人、いじめられている人、まわりで見ている人がいる。多くは見ている人であり、その中には何とかしたいけれど、巻き込まれたくないという思いを抱えている人も多い。自分に矛先が向くことが怖いと思う気持ちや自分が嫌われたくないという思いもあるだろう。しかし、このまわりの見ている人が公正・公平な態度をとることが大切で、クラスという雰囲気を変えていき、いじめを生まない人間関係になっていく。本資料は学級内でいじめがおきている資料である。直接かかわりの深い内容だが、主人公のもっている正義感、迷い、いじめている子たちに対する怖さなど、追体験させることで公正公平に行動する態度を養っていきたい。

【いじめ問題予防の視点】
児童一人一人には、自分よりも弱い立場の人をつくるなど、いじめにつながる気持ちが潜んでいる。その心に切り込み、正対し共に考えていく場を設けることが大切である。

ね　ら　い

● 相手の立場を考え、公正・公平に行動しようとする態度を育てる。

［内容項目4－（2)］

授業の流れ

● いじめを見かけたことがありますか？その時の気持ちは？（アンケートをしようする。）

↓

● 私の気持ちを中心に考えていく。

⑴私はどんな気持ちで、ひとりでいる明菜のところに行き、進んで声をかけたのだろう。
⑵明奈のところに行かなくなった私は、どんなことを考えていたのだろう。
⑶「あなたも同じ…」という言葉を聞いて私はどんなことを思ったのだろう。
⑷私は立ち上がり、クラスに何を訴えたのでしょう。それは、どんな気持ちからだろう。

⑴まわりとは違う、わたしはいじめをしないと思っている主人公に共感させていく。
⑵明奈を心配する気持ちと自分を守りたい気持ちの両方を取り上げ、思い悩む思いを押さえる。
⑶傍観者もいじめる人と同じように相手を傷つけていることに気づくような意見を引き出していく。
⑷私を突き動かした気持ちを考えさせる。
いじめは、とくに見ている人が勇気をもって公正公平な態度をとることが大切であり、そんな雰囲気がうまれることで、いじめはなくなり、互いを認め合うことになることを押さえる。

↓

●教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

●社会科の身分制度の仕組みの学習において、心のノートを使いながら差別を許さない心を育てる。
●総合的な学習の時間を通して、福祉体験、高齢者体験等、公平意識の態度を育成する。

忘れていたこと

（「彩の国の道徳」自分を見つめて　埼玉県教育委員会）

豊かな人間関係をつくるために -「感謝」の心-

人は一人では生きていくことはできない。互いに助け合い、協力し合うことで、初めて生きていくことができる。豊かな人間関係を築いていくためにも、周囲の支えや善意によって日々の生活や今の自分があることに気づき、それに対する感動や喜びの表出として感謝の気持ちを素直に表現し、相手に届けられる心を持てるようにしたい。

本資料は、文化祭の準備に追われ仲間を責める生徒会長の宏が、副会長である拓海の一言から感謝の大切さに気づく資料である。子供たちには、日々の生活が自分を含めた互いの助け合いによって支えられていることに気づかせ、感謝の念を持つことの大切さを考えさせる資料である。

【いじめ問題予防の視点】
人は日々の生活で共に助け合い、互いに感謝することに気づかせ、自ら豊かな人間関係を築こうとする態度を育て、いじめをしない人間関係づくりを意識させるようにする。

ね　ら　い

●多くの人々の善意や支えによって今の自分があることに感謝し、それに素直に応え相手に届けようとする態度を育てる。　［内容項目2－（6）］

授業の流れ

●事前アンケートから友達に助けられた経験について意見を出し、そのときに感じたことについて話し合う。

↓

●文化祭の準備を通して宏が気づいたことを中心に、「感謝」とは何なのかを話し合う。
⑴咲紀が担当する装飾の仕事が遅れているのを見て、宏はどんな思いを感じているだろうか。
⑵拓海の態度に、宏はなぜ何も言い返すことができなかったのだろうか。
⑶新聞をまとめているうちに、宏はどんなことに気づいたのだろうか。
⑷文化祭当日の朝、拓海から感謝されている話を聞き、宏はどんなことに気づいたのだろうか。

●　一人一人の思いや考えを大切にし、それぞれの意見のよさを広めるようにする。
⑴会長としての責任から、周りを責めてしまう宏の気持ちに共感させる。
⑵拓海に言われたことにすっきりしない気持ちを感じながらも、自身の言動を顧みている宏の気持ちの変化を感じ取らせる。
⑶周囲の助けがあって文化祭の準備ができていることに気づいたことをとらえさせる。
⑷互いに感謝することの大切さを考えさせ、感謝する気持ちが豊かな人間関係づくりに大切なことに気付かせる。

↓

●豊かな人間関係と「感謝」について、教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

●学級活動や特別活動・・体育祭や合唱祭といった学校行事や学級活動の中で、自己理解・他者理解・信頼関係づくりを行い、感謝の気持ちを持って仲間に接しようとする意識を育む視点で教育活動を進める。

最初の公認女性医師・荻野吟子

（「彩の国の道徳」自分を見つめて　埼玉県教育委員会）

よりよい社会とは？ -差別や偏見に立ち向かう心-

人は他の人との関わりにおいて生きるものであり、よりよく生きたいという願いをかなえるためには、差別や偏見のない社会の実現が不可欠である。よりよい社会の実現のためにも、生徒が差別や偏見のある不公平な社会に対して、それを否定するようなたくましい心を持ち、望ましい社会を実現する強い心を持てるようにしたい。

本資料は、男尊女卑の風潮の中、日本最初の公認女性医師となった荻野吟子を扱った資料である。女性の人権が軽視されるという当時の社会に対し、公平でよりよい社会の実現のために強く生きた荻野吟子の生き方を通して、差別や偏見に立ち向かう気持ちと向き合うことのできる資料である。

【いじめ問題予防の視点】
よりよい社会の実現について考えさせることで、差別や偏見を許さない強い心や、いじめを許さないたくましさを持てるようにする。

ね　ら　い

●あらゆる差別や偏見をなくすように努力し、よりよい社会の実現に努めようとする態度を育てる。

［内容項目4－（3）］

授業の流れ

●荻野吟子の一生やその業績について知る。また、当時の封建的な風潮についても触れる。

↓

●荻野吟子の差別や偏見に負けない生き方から、よりよい社会とは何なのかを話し合う。

⑴ただ一人の女性というだけで、露骨な嫌がらせを受けた吟子はどんな気持ちだったのだろうか。

⑵医院開業の許可が却下されても、許可を得るための運動を続ける吟子を支えたのはどのような気持ちだったのだろうか。

⑶ついに受験機会を与えられた吟子はどんなことを考えているのだろうか。

⑷よりよい社会をつくるためには、どんなことが大切なのだろう。

⑴女性というだけで差別を受ける苦しさをおさえるとともに、このような社会に対して憤りを感じる主人公の気持ちに共感させる。

⑵差別や偏見を受けても運動を続ける主人公の生き方から、よりよい社会にしたいという強い思いを浮き彫りにする。

⑶主人公の強い心が社会を変えたことに着目させる。

⑷これまでの話し合いをもとに、差別や偏見のない社会を実現するためには、どのようなことが大切なのかを考えさせる。

↓

●　よりよい社会について教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

●学級活動・・学級でのあらゆる生活場面で、いじめや差別、偏見を許さない強い心と、一人一人がよりよい学級を作っていこうという意識を育む視点で教育活動を進める。

私たちの初詣

（「彩の国の道徳」自分を見つめて　埼玉県教育委員会）

周りに流される自分でいいのかな？

中学生になると、自我に目覚め、自主的に考え、行動することができるようになる。しかし、中学生の時期は他人の言動に左右され、流されやすい面がある。自らの意志ではなく、集団で特定の個人を避けたり、いじめたりする場面も見られる。そこで、何が正しくて、何が誤りであるのか、自ら善悪の判断をして、望ましい行動がとれるようにしたい。

本資料は、新年にメールの返信をしなかった友達のことを周りの友人たちが避けはじめ、主人公が「周りの友達」と「ひとりの友達」の間で揺れるという資料である。子どもたちには、周りに流されずに自分で正しい判断をし、誠実に生きようとする勇気を与えられる資料である。

【いじめ問題予防の視点】
一時の感情や周りの意見に流されることなく、自主的に判断することの大切さを自覚し、衝動的な感情や雰囲気で他を傷つけることがないようにする。

ね　ら　い

●他人の言動に左右されることなく、自主的に善悪の判断ができ、自分や他人に対して誠実に行動する態度を育てる。〔内容項目1－（3）〕

授業の流れ

●心のノート『自分のことは自分で決めたい』のページを使い、どんな時に「まわりの意見に流される自分」がいたか、記入して経験を思い出す。

↓

●主人公「美香子」の気持ちを中心に話し合う。
⑴真希に「優子はメール来ないからいいんじゃない？」とメールを受けた美香子は、どんな気持ちだったのだろうか。
⑵美香子はどうして、「ちょっと。真希、待って」と言って真希の携帯を取り上げたのだろうか。
⑶美香子はどんな気持ちで、「私、優子にあやまりたい。」と真希に電話したのだろうか。

⑴優子のことも大切にしたいと考えながらも、真希の意見に流されてしまう美香子の気持ちに共感させる。
⑵真希の優子に対する行動がエスカレートする中で、周りに流されずに真希のことを守ろうとする美香子の勇気を考えさせる。
⑶自分で善と悪の判断をして、自分や友達に対して誠実に行動しようとする美香子の気持ちの変化に気づかせる。

↓

●周りに流されずに、自分で考えて誠実に行動し、生き方の自信を得た教師の経験談を聞く。

他の教育活動との関連

●学級活動…係活動や給食、清掃の場面で、自主的に正しい判断で行動しようとする態度を育てる。
●情報教育…携帯電話やインターネット、メールの使い方など、情報モラル教育と関連させる。

仮入部

（「彩の国の道徳」自分を見つめて　埼玉県教育委員会）

本当の友達って、どんな関係なの？

真の友情とは、相互に変わらない信頼があって成り立つものである。そして、相手の人間的な成長を願い、互いに励まし合い、高め合える関係である。中学生の時期になると、そのような関係になれる友達を求めるようになる。生徒には、相手の表面的な言動だけでなく、内面的なよさに目を向け、相手の成長を心から願って互いに励まし、忠告し合える信頼関係を育てたい。

本資料は、友達が自分から入部したい部と違う部に誘われた主人公が、「自分がやりたいこと」と「友達関係」の２つの思いで迷うという資料である。子どもたちには、望ましい友人関係や自分自身の友達関係を省みることのできる資料である。

【いじめ問題予防の視点】

いつも一緒に行動するのが友達だと考える傾向は強いが、真の友情について考え、離れていても自己の目標に向かって成長することを願い合う信頼できる友達関係の大切さに気づかせたい。つらいときにも支え合える友達関係の大切さに気づかせていきたい。

ね　ら　い

● 友達関係について考えを深め、互いに励まし合い、高め合える友達を求めようとする態度を育てる。

［内容項目2－（3）］

授業の流れ

●『本当の友だち』とはどんな友だちなのだろうか。事前アンケートを活用し、自分たちが現在どう考えているのかを知る。

↓

●主人公「雅恵」の気持ちを中心に話し合い、「本当の友だち」とはどういうことなのか考える。

⑴「ごめん、バスケット部に行こうと考えていたの」と由美に言ってしまった雅恵は、どんな気持ちだったのだろうか。

⑵「バスケット部やめて、ソフト部に行こうかな」とつぶやいた雅恵は、どんな気持ちだっただろうか。

⑶由美に「雅恵とは、これからも大切な友だちだよ。」と言われて、雅恵はどんなことに気づいたのだろうか。

⑴友達の誘いを断った雅恵の気持ちを考えさせ、バスケット部入部への思いの強さを感じ取らせる。

⑵雅恵の心の葛藤に気づかせ、「友情」についての多様な考えを引き出すようにする。

⑶「本当の友だち」とは信頼し、支え合うことが大切であることに気づかせ、自分の友達関係を振り返らせる。

↓

● 真の友情や望ましい友達関係ついて、教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

●学級活動・・・話し合い活動を進める中で、自己理解や他者理解、信頼関係づくりを行うことで、友達関係を広げ、深めていくきっかけとしたい。

心のパス交換

（平成24年度埼玉県道徳教育指導資料作成委員会）

相手の立場に立って、広い心で

互いのもつ異なる個性を見つけ、違うものを違うと認め、ときには許す私心のない寛容な心、偏狭なものの見方や考え方のない広い心を育てたい。

本資料は、予想外にバスケットボール部の副部長に指名された主人公康太が、部長のケガ、その原因となったチームメートとの関係を通して、自他の個性の違いに気づき自らを振り返り、相手の立場に立った寛容な心について考えるという資料である。

【いじめ問題予防の視点】

中学生の時期は、同調過剰の傾向を生じ、いじめのような問題に発展することもある。多様な個性を認め合い、それぞれの差異を尊重するという態度を育てることにより、互いに認め合い、許し合う人間関係づくりにつなげさせたい。

ね　ら　い

● 互いの個性や立場を理解し、それぞれの差異を尊重し許し合える寛容な態度を育てる。

［内容項目2－（5）］

授業の流れ

●「自分だけが、なんで……。」というような経験をしたことについて、事前アンケートを行い、その結果を提示し、簡単に話し合う。

↓

●主人公「康太」の気持ちを中心に話し合う

⑴勇人についてのチームメートからの言葉を聞きながら、「康太」はどんな気持ちだったのだろう。

⑵心のパスが届いていることに気づいた「康太」はどんな気持ちだったのだろう。

⑶勇人への電話を手にする「康太」は、どんなことを考えているだろうか。

●主人公と友だちの姿を通して、あらためてどんなことを考えましたか。

⑴部長のいないチームの現状や勇人の対応に苦悩する主人公に共感させるとともに、自分にない良さをもつ直也や勇人に対する主人公の気持ちに着目させる。

⑵「自分が認められている」ことへの喜びだけでなく、勇人や直也の考えや立場についても気づいていく康太の多様な思いを引き出すようにする。

⑶康太の覚醒した心情を十分に押さえる。

●主人公の、自分自身や勇人に対する思いの変化について感じさせる。

↓

● 他の人の考えや行動から、自分の考え方が大きく変わり、人間的に成長したという経験について、教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

●学級活動、部活動、委員会活動等において、他の人との交流を通じて、自分の考えを広げ豊かにすることにより、互いを認め合い、許し合える人間関係づくりにつなげる。

後味の悪い再会

（「彩の国の道徳」明日をめざして　埼玉県教育委員会）

望ましい友人関係の構築

他者との良好な人間関係を構築することは、人間が社会生活を営む上で極めて重要である。しかし、ちょっとした言動の行き違いが原因で人間関係が壊れてしまうこともある。そこで、望ましいコミュニケーションの在り方について考え、実践しようとする態度を育成することが大切である。

資料に登場する彩香は、相手の気持ちを考えずに自己を主張する。また、奈緒は、相手に合わせてしまって自分の意見や考えを相手に上手く伝えることができない。資料を通して、友達に対する正しく理解しようとする心情を育てたい。

【いじめ問題予防の視点】

真の友情について考え、自己の友達関係を見つめ直すことで、生徒が友達をいじめたり、あるいは友達がいじめられているのを見て見ぬふりしたりすることのないようにする。

ね　ら　い

● 他者を正しく理解し、言葉による意思の疎通が図れ、寛容な心で友達と接していこうとする態度を育てる。〔内容項目2－（1）〕

授業の流れ

● 友達に対して、今までに言ってはいけないことを言ってしまって、いやな気分になった経験はありますか。

↓

● 「後味の悪い再会」を読んで、奈緒の気持ちを中心に話し合う。

⑴彩香の話を聞いているときの奈緒はどんな気持ちだったのだろうか。

⑵奈緒が彩香に言ってしまったことは仕方がないことだったのだろうか。

⑶奈緒はこのあと、どうしただろうか。

●人間関係を築いていく上で、これから気をつけたいこと、または、今まで気を付けてきたことは何か。

⑴見たいテレビがあるのに我慢して彩香の話を聞いている奈緒の気持ちに共感させる。

⑵帰りたい気持ちを伝えることはよいのだが、奈緒の言い方がよくなかったことに気付かせる。

⑶グループ内で奈緒役と彩香役になり、望ましい人間関係を築くために何が必要かを考えていく。

● 他者を正しく理解し、良好な人間関係を構築して行くことについて考えを深める。

↓

● 寛容に関する教師の説話を聞く

他の教育活動との関連

● 学級活動・学年行事・学校行事を進める中で、他者理解を深め、良好な人間関係を構築して行こうとする態度を育てる。

誠の心　　～渋沢栄一物語～

（「彩の国の道徳」明日をめざして　埼玉県教育委員会）

差別・偏見・いじめを絶対に許さない心

21世紀の現在においても、人種・宗教・国籍・病気等によって様々な差別がなくならない状況がある。そこで、地球上の人類がみな平等に権利を有するものであることを学び、差別や偏見のない社会の実現に努めようとする態度を育てる。

埼玉県の偉人のひとりである渋沢栄一の生涯のエピソードを通じて、差別や偏見のない社会の実現に向け、生徒たち一人一人が、「自分はどう在るべきか」について考え、人間の誇りある生き方について思いを馳せることができる資料である。

【いじめ問題予防の視点】

村人の差別や偏見にとらわれていることなくたった一人で娘をかばった母の姿を通し、相手の立場にたって、物事を考えられるようなやさしさや勇気ある気持ちを育てる。

ね　ら　い

● 差別や偏見がいかに同じ人間を苦しめているかについての理解を深め、その社会に立ち向かう勇気を学ぶ。　［内容項目4－（3）］

授業の流れ

● 郷土の偉人の「渋沢栄一」の業績について理解させ、社会貢献を通じて、差別や偏見のない平和な社会の実現へ向けて努力しようとする姿勢を育てる。

↓

● 母親のとった行動から「渋沢栄一」は何を学んだのかを話し合う。

(1)栄一は病気の娘に対し、どんな思いを抱いていたのか。

(2)娘は、まわりの村人に対し、どんな気持ちでいたのか。

(3)まわりの村人は娘に対し、どんな気持ちでいたのか。

(4)母親は栄一のどんな態度が悲しかったのか。

● 母親、村人、娘の気持ちも考えることで、様々な考え方があることに気付かせる。

(1)娘を積極的に差別したわけではないし、自分の母親に対する心配もあったことも理解させる。

(2)差別されている人間の気持ちをくみ取らせる。

(3)村人の娘に対する考えと似ている事例は、自分たちの生活にないかを話し合わせる。

(4)母親は栄一にどんな大人になってほしいと思っていたかを話し合わせる。

↓

● 誠の心とは、どういうものか教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

● 学級活動・学年行事・学校行事を進める中で、他者理解を深め、差別や偏見をなくそうとする意欲を高めさせる。

見えない相手

（「彩の国の道徳」明日をめざして　埼玉県教育委員会）

人間の弱さを克服する強さ

携帯メールやインターネットの普及により、その利用範囲は急速に広がっている。その利用の仕方によっては、相手を傷つけ生き方まで変えてしまうことがある。「ネットいじめ」の事例をとおして、何が正しく、何が誤りであるかを自ら判断し、責任ある行動がとれる態度を養う。

「掲示板」への書き込みをきっかけに、友人関係が悪化してしまった主人公。友人とのつきあいと自分に対する誇りの間に挟まれながらも、誇りある生き方を選択した主人公の心情に迫りたい。

【いじめ問題予防の視点】
・友人の誘いに流れてしまう人間の弱い部分に気づかせながらも、悪への迎合に陥らない気持ちもあることに気づかせる。また、いじめを受けても周囲に助けてくれる人がいることに気づかせる。

ね　ら　い

- 人間には、弱い部分もあるがそれを克服する強さや気高さを持ち合わせていることに気づかせ、誇り高い生き方を選択できるようにする。［内容項目３－（３）］

授業の流れ

- メールを含むインターネットの利用はどんなときに行っているか。
- メールを含むインターネットの利用の危険性にはどんなことがあるか。

↓

- 「見えない相手」を読み、主人公の気持ちを中心に話し合う。
  ⑴Ａ子と親しくなり始めた頃、メールを含むインターネットの利用を主人公はどう感じていたか。
  ⑵Ａ子からＢ子の悪口を「掲示板」に書き込むように誘われたとき、主人公はどう感じたか。
  ⑶誘いに応じなかったために、ネットいじめにあった主人公はどう感じたか。

●友達の多様な意見にふれることで、それぞれの感じ方や考え方のよさに気付かせる。
⑴直接顔を合わせずにやりとりできることから、自分の本心を気安く他人に伝えられるツールであることに気づかせる。
⑵友人の誘いだから書き込もう、という考えと、Ｂ子はいやな気持ちになるからやめよう、という考えで葛藤する感情を味わわせる。
⑶先生に打ち明け、表面上解決したものの、その後も心の中に冷たい痛みを感じる主人公に気づかせる。

↓

- 人間の持つ弱さと強さについて、教師の説話を聞く。

他の教育活動との関連

- 情報の授業や学級活動・学年行事・学校行事を進める中で、他者理解を深め、良好な人間関係を構築する態度を育てる。

「人間としての在り方生き方に関する教育」の推進方針

公立高等学校における道徳教育について、一層の推進を図るため、日本国憲法や教育基本法、学校教育法、学習指導要領に基づき、本県の「人間としての在り方生き方に関する教育」の推進方針を策定する。

１　目　標

生徒が自己探求と自己実現に努め、社会の一員として自覚し、よりよい人間関係や社会を築き、未来を切り拓くための生きる力を高めるよう、その基盤となる道徳性を養う。

２　内　容

高等学校学習指導要領を基に、小・中学校における道徳教育の内容も踏まえ、自他の生命を尊重する精神、自律の精神及び社会連帯の精神並びに義務を果たし責任を重んずる態度、人権を尊重し差別のないよりよい社会を実現する態度などを育てる人間としての在り方生き方に関する指導を行う。

具体的な内容については、以下を基本とし、生徒自らが人間としての在り方生き方を考える視点とする。

１　主として自分自身に関すること
(1)　望ましい生活習慣、節度、節制に関すること　１－(1)
(2)　より高い目標を目指し、達成しようとする強い意志に関すること　１－(2) (4)
(3)　自律の精神、誠実、責任感に関すること　１－(3) (5)
２　主として他の人とのかかわりに関すること
(1)　礼儀、思いやり、感謝、寛容に関すること　２－(1) (2) (5) (6)
(2)　信頼、友情に関すること　２－(3)
(3)　異性への理解と尊重に関すること　２－(4)
３　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること
(1)　生命の尊重に関すること　３－(1)
(2)　自然愛護、環境の保全に関すること　３－(2)
(3)　人間としての弱さや克服する強さの自覚、誇りある生き方に関すること　３－(3)
４　主として集団や社会とのかかわりに関すること
(1)　権利と義務、法やきまりの遵守に関すること　４－(1)
(2)　公徳心、社会連帯に関すること　４－(2)
(3)　差別や偏見のない社会の実現に関すること　４－(3)
(4)　集団の意義や役割に関すること　４－(4)
(5)　勤労の尊さ、奉仕の精神に関すること　４－(5)
(6)　家族や社会の一員としての自覚、郷土への誇りを高めることに関すること　４－(6) (7) (8)
(7)　伝統と文化の継承、国際理解、世界の平和と人類の幸福への貢献、日本人としての誇りを高めることに関すること　４－(9) (10)

（注）内容については、中学校学習指導要領と同様に、「１　主として自分自身に関すること」、「２　主として他の人とのかかわりに関すること」など４つの視点で構成する。
また、右端の数字は中学校学習指導要領における道徳の内容の番号であり、その関連を示した。

３　実施方法

（１）全生徒を対象に各学年において、「２　内容」で示した４つの視点から、原則として各項目１回以上、さらに、各学校の生徒の状況や生徒指導上の課題などから最も重要と思われる内容について、道徳教材を活用した学習を年間を通じて合計５回以上実施するよう努める。なお、平成２１年度については、年間３回以上の実施に努める。

（２）実施に当たっては、学校の実情に応じて、学習効果が高まるような時期、内容について配慮する。

（３）原則として、ロングホームルーム等の時間を活用して指導する。

（４）従来から各学校で行っている教育活動全体を通した「人間としての在り方生き方に関する教育」については継続して行う。

（５）指導に当たっては、生徒が人間としての在り方生き方を主体的に考え、豊かな自己形成ができるように十分配慮する。

４　推進体制の整備

（１）推進委員会等を設置し、組織的な推進体制を整備する。なお、校内の既存の委員会を活用することも差し支えない。

（２）推進委員会等においては、下記の事項等について検討し、推進状況を把握する。

・「２　内容」を踏まえ、各学校の指導の重点を設定する。

・各学年の指導計画（実施時期、内容、教材の選定、指導案等）を検討する。

・必要に応じ、研修を計画し、実施する。

（３）推進委員会等の委員としては、例えば、校長、副校長、教頭、教務主任、各学年主任、生徒指導主任等が考えられる。

５　評　価

数値などによる評価は行わない。

６　教　材

（１）「明日をめざしてー高校生のための人間としての在り方生き方教育ー」等、県教育委員会、または学校が作成する道徳教材等を幅広く使用する。

（２）これらのほかにも、例えば、映像ソフト、映像メディアやインターネット等の情報通信ネットワークを利用した道徳教材、実話、写真などの多彩な形式の道徳教材に着目するなど、魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用を図る。

（３）平成２２年度以降については、「２　内容」を網羅した体系的な埼玉県独自の道徳教材を各学級に生徒数分配布するので、これを主たる教材として有効に活用する。

７　指導計画

（１）ロングホームルーム等の年間指導計画に位置付ける。

（２）平成２２年度から各公立高等学校で作成する道徳教育の「全体計画」において、学年、実施時期及び内容等について具体的に明記する。

彩の国の道徳　　道徳教育指導資料集

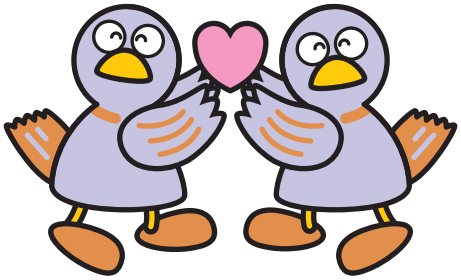
学級づくりの羅針盤

～いま、道徳が「いじめ問題」にできること～

平成25年　3月発行

編集　埼玉県教育委員会県立学校部　生徒指導課

〒330-9301　さいたま市浦和区高砂3-15-1
電話　048-830-6745
FAX　048-830-4952
E-mail　a6740@pref.saitama.lg.jp



埼玉県のマスコット「コバトン」